



大地の芸術祭における『協働』と地域の持続可能性の関係 —《ポチョムキン》と倉俣集落を事例に—

The Relationship between “Collaboration” and Sustainability
in Communities in Echigo-Tsumari Art Triennial :
A Case Study of “Potemkin” and Kuramata Village

結論

本研究における長期的なフィールドワーク調査によって、大地の芸術祭の中心を担う「協働」の取り組みに関する多様な認識が明らかとなった。現段階で全ての作品において「協働」が見られるとは言い難いが、成熟段階にある「協働」は地域のみならず芸術祭に対しても持続可能性をもたらす。

背景・研究対象

新潟県越後妻有地域（十日町市・津南町）で 2000 年から開催されている現代アートの国際展「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ（以下、大地の芸術祭）」を対象に、そこで運営の中心を担う「協働」の取り組みについてこれまでの変遷と現状、そして今後のあり方を明らかにしていく。

大地の芸術祭で発表される作品のほとんどは、地域文化に根差したサイトスペシフィックな性質を持ち、その制作・運営には作家や住民、芸術祭スタッフ、行政、サポーターといった多様な主体が関わる。その一連の活動には「協働」という言葉が開催当初から一貫して使われ、大地の芸術祭は地域を活性化する取り組みとして、世界的に注目を集めている。しかし、大地の芸術祭における「協働」には明確な定義が無い上に、芸術祭を代表する作品の 1 つである カサグランデ & リンターラ建築事務所による《ポチョムキン》（2003、図版）と集落の間では地域が活性化された痕跡はなく、そこでの活動が「協働」と言える段階まで達していないことが明らかになってきた。

調査方法

本研究においては次の 3 つの視点から調査を実施し、大地の芸術祭における「協働」の変遷とそのあり方を明らかにしていくとともに、その取り組みが芸術祭や地域にもたらす可能性について考察を進めた。

①「協働」とは何か …………… 第 1・4 章

文献調査と定義の仮定、「協働」の主体に対するヒアリング調査

②《ポチョムキン》における「協働」 …………… 第 2・3 章

作品維持活動への参画と、住民に対するアンケート及びヒアリング調査

③「協働」と持続可能性の関係 …………… 第 1・2・3・4 章

上記の調査を踏まえた「協働」の変遷と効果、課題の考察

ポチョムキン

《ポチョムキン》は、2003 年に完成の十日町市倉俣にある大地の芸術祭の屋外作品である。作品はコルテン鋼の壁で全体を覆い隠す構造をもち、内部には白砂利が敷かれた空間が広がっている。所々にはかつての林の木々が残され四季折々の風景を見せるほか、廃材を用いたブランコや東屋が配置され、大地の芸術祭を代表する作品である。ここでは、《ポチョムキン》に関連するさまざまな調査を行った。

これらの調査は、《ポチョムキン》がどの程度地域に浸透しているのか、また、作品の制作や維持管理の段階で、どのような住民の関わり方があったのかを明らかにした。《ポチョムキン》では、第 5 回展（2012）以降は住民が積極的に作品に関わる機会が少なく、作品に対する関心や愛着の低さが「協働」の発展を妨げている可能性が浮上した。しかし、集落には継続的に作品に関わる者や、作品に対して好印象を持つ者が一定数存在し、今後《ポチョムキン》において「協働」の取り組みが集落内で発展する兆しが示唆された。

「協働」の性質と現状

調査によって性質が見えてきた大地の芸術祭における「協働」を、本研究では「越後妻有地域の実情を都度考慮しながら、作品を取り巻く多様な人々によって大地の芸術祭を実行する主体的な活動全般とその過程」と仮定した。

「協働」は大地の芸術祭総合ディレクターである北川フラムにとっても重要な意味を持つが、その内容は時代や場所、語る人によって様々であることに加え、全ての作品で「協働」が成立しているとは限らない。ただし、本研究のヒアリング調査においては、「協働」に関する内容には他者同士が関わっていくことや、継続的な活動であること、自らの力を主体的な形で動員すること、関わる地域やジャンルを拡大させること、といった要素が共通項として明らかとなった。そして、これらは「協働」を定義し、それぞれの活動を推進していく上でも指標となる重要なキーワードである。

展望

「協働」の取り組みは主体や作品、集落の性質が相互に影響し合い、初めからうまくいくとは限らない。しかし、大地の芸術祭は 20 年以上の歴史において、地域や運営上の困難を「協働」によって乗り越えてきた。延期を経て、第 8 回展を迎える大地の芸術祭と「協働」は今もなお進化を遂げていく。



大地の芸術祭における『協働』と 地域の持続可能性の関係

—《ポチヨムキン》と倉俣集落を事例に—

The Relationship between “Collaboration” and Sustainability
in Communities in Echigo-Tsumari Art Triennial :
A Case Study of “Potemkin” and Kuramata Village

新潟県越後妻有地域（十日町市・津南町）で開催される「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は、地域を活性化する取り組みとして世界的に注目を集め、国内でも頻繁に催される芸術祭やアートプロジェクトの先駆的存在である。しかし、筆者自身がその運営に携わる中で、活動の核となる「協働」は明確な定義を持たず、作品ごとに内容が異なる上に地域を活性化させる活動ばかりでは無いことが示唆された。

本研究では、地域内外からの多大な協力により長期的なフィールドワーク調査が実現した。これにより、大地の芸術祭における「協働」のこれまでの変遷と現状、そして今後のあり方が示されるとともに、「協働」の取り組みが大地の芸術祭と越後妻有地域の双方に持続可能性をもたらすことが明らかとなった。

調査1

「協働」とは何か

文献調査と定義の仮定、「協働」の主体に対するヒアリング調査

文献調査によって「協働」の歴史や地域内で関わりの深い14の主体、その活動内容を整理し、大地の芸術祭における「協働」を仮定した。また、大地の芸術祭の運営経験がある異なるジャンルの6名にヒアリング調査を行った結果、「協働」を定義し、それぞれの活動を推進していく上で重要な指標となるキーワードが示された。

文献調査による「協働」の仮定：

「越後妻有地域の実情を都度考慮しながら、作品を取り巻く多様な人々によって大地の芸術祭を実行する主体的な活動全般とその過程」

ヒアリング調査による「協働」のキーワード：

他者同士が関わっていくこと / 継続的な活動であること / 自らの力を主体的な形で動員すること / 関わる地域やジャンルを拡大させること

調査2

《ポチョムキン》における「協働」

作品維持活動への参画と、住民に対するアンケート及びヒアリング調査

《ポチョムキン》は、カサグランデ & リンターラ建築事務所によって十日町市倉俣集落に制作された大地の芸術祭の屋外作品である。作品はコルテン鋼の壁で全体を覆い隠す構造をもち、内部には白砂利が敷かれた空間が広がる。複数の現地調査により、《ポチョムキン》での活動は「協働」と言える段階まで達していないことが明らかとなった。住民が積極的に作品に関わる機会が少ないことや、作品に対する関心や愛着の低さが「協働」の発展を妨げている要因として考えられる。一方、集落には継続的に作品に関わる者や作品に対して好印象を持つ者が一定数存在し、今後《ポチョムキン》において「協働」の取り組みが集落内で発展する可能性がある。



カサグランデ & リンターラ建築事務所《ポチョムキン》(2003)
大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003 出品・恒久展示作品
筆者撮影 (新潟県十日町市倉俣)

集落における調査実績：

- ・活動参加内容 整備見学1回、整備サポート2回 計3回
- ・アンケート実施期間 2021年8月5日(木)～8月15日(日)【11日間】
- ・アンケート質問数 27項目
- ・配布数 依頼時点で不参加を表明した家庭および空き家を除く63世帯(180部)
- ・回答数 83(1人×19世帯、2人×23世帯、3人×6世帯) ※集落人口212名(2021年6月末時点)
- ・ヒアリング実施数 10件 (2021年9～11月に実施)

調査3

「協働」と持続可能性の関係

全ての調査を踏まえた、「協働」の変遷と効果および課題の考察

大地の芸術祭の開催当初は地域からの反対や批判が多く、「協働」の取り組みが理解されるまでにかかりの労力と時間を要してきた。しかし、20年以上にもわたり「協働」が行われ続けてきたことで、現在では発展的な「協働」の活動が多く見られ、その効果も明らかになってきた。「協働」がもたらす効果にはいくつかの段階があり、最終的には地域と芸術祭が相互に発展・活性化し合うことで双方に持続可能性がもたらされるようになる。ただし、《ポチョムキン》のように作品完成からの経過年数に関係なく「協働」の取り組みが進んでいないような作品では、集落の事情も特に考慮しながら、より多くの住民が主体的かつ継続的に活動することを促す体制や作品に対する愛着および誇りの醸成が求められる。

「協働」がもたらす効果の段階：

- ①制作や管理など作品との関わりしろが生まれる→②住民たちが来訪者の反応に触れる→③地域や作品に愛着や誇りが生まれる→④芸術祭の開催や作品自体が喜ばれるようになる→⑤集落内での「協働」が続いていく(地域に対する持続可能性)→⑥現在まで芸術祭が続いていく(芸術祭に対する持続可能性)

結論

本研究における調査によって、大地の芸術祭の中心を担う「協働」の取り組みに関する多様な認識が明らかとなった。現段階では全ての作品において「協働」の効果が見られるとは言い難いが、成熟段階にある「協働」は地域のみならず大地の芸術祭に対しても持続可能性をもたらす。

大地の芸術祭における「協働」と地域の持続可能性の関係
— 《ポチョムキン》と倉俣集落を事例に—

The Relationship between "Collaboration" and Sustainability in Communities
in Echigo-Tsumari Art Triennial:
A Case Study of "Potemkin" and Kuramata Village

富山大学芸術文化学部芸術文化学科
地域キュレーションコース

長津 晴菜 Nagatsu Haruna

長津 晴菜 Nagatsu Haruna

富山大学芸術文化学部芸術文化学科

地域キュレーションコース

大地の芸術祭における「協働」と地域の持続可能性の関係

—《ポチョムキン》と倉俣集落を事例に—

要旨

近年、日本国内においては「地域活性化」のブームとともに、地域密着型のアートプロジェクトや芸術祭が隆盛を極めている。本論文では、アートで地域を元気にする取り組みの先駆けとも言われる「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ（以下、大地の芸術祭）」を題材にし、大地の芸術祭の一連の取り組みにおいて作家や住民、芸術祭スタッフ、行政、サポーターといった多様な主体の間で生まれる「協働」に対して調査を進めてきた。大地の芸術祭における「協働」は、2000年の第1回展開催当初から制作や運営のキーワードとされているにもかかわらず、その明確な定義付けは行われていない。そこで、本研究では、大地の芸術祭における「協働」の変遷とその在り方を明らかにしていくとともに、「協働」の取り組みが芸術祭や地域にもたらす可能性について展望することを目的とする。

第1章では、大地の芸術祭における「協働」を「越後妻有地域の実情を都度考慮しながら、作品を取り巻く多様な人々によって大地の芸術祭を実行する主体的な活動全般とその過程」と仮定し、芸術祭の変遷と共に「協働」の主体や取り組みの種類を把握した。

第2、3章では、具体的な「協働」の取り組みとして《ポチョムキン》という作品を取り上げた。大地の芸術祭は地域活性化の取り組みとして注目を集めるが、《ポチョムキン》と集落の間では地域が活性化された痕跡はなく、そこでの活動が「協働」と言える段階まで達していない。実際に現地でアンケート調査及びヒアリング調査を行った結果、《ポチョムキン》は住民からの支持が低く、それが「協働」の発展を阻害している可能性が浮上した。しかし、集落には継続的に作品に関わる者や、作品に対して愛着を持つ者が一定数存在し、今後「協働」の取り組みが集落内で発展する可能性が示唆された。

第4章では、2021年現在の「協働」の在り方に焦点を当て、現在における「協働」の主体に対してヒアリング調査を行った。それにより、「協働」の取り組みにいて必要な要素が精査されるとともに、発展した「協働」には芸術祭や地域に対して持続可能性をもたらすことが明らかとなった。

結果として、大地の芸術祭における「協働」は芸術祭の歴史と共に変遷を遂げており、本調査によって時代や場所ごとに固有の「協働」のあり方が示された。これにより、他の地域・集落においても「協働」が発展し、持続可能性がもたらされることが期待される。

目次

はじめに	1
第 1 章 大地の芸術祭と「協働」	3
1.1 大地の芸術祭の概要	3
1.2 大地の芸術祭の変遷	3
1.2.1 開催まで	3
1.2.2 第 1 回展（2000）～「今年の越後妻有」（2021）までの歩み	4
1.3 大地の芸術祭における「協働」	8
1.4 協働の種類と主体	9
1.5 協働の事例	14
1.6 考察	15
第 2 章 ポチヨムキンにおける「協働」	17
2.1 作品について	17
2.2 作家について	18
2.3 集落について	19
2.4 問題提起 地域との関わり方について	19
第 3 章 《ポチヨムキン》における現地調査	22
3.1 調査方法	22
3.1.1 作品の性質の分析	22
3.1.2 《ポチヨムキン》における維持管理活動	26
3.1.3 倉俣集落住民に対する《ポチヨムキン》および地域への意識調査	27
3.1.4 アンケート調査で得た結果をもとにしたヒアリング	40
3.2 《ポチヨムキン》と倉俣集落における調査の考察	42
第 4 章 芸術祭と地域の持続可能性	44
4.1 「協働」による芸術祭と地域の相互作用	44
4.2 「協働」の主体に対するヒアリング調査	45
4.3 ヒアリング結果を踏まえた考察	50
結論	52
参考文献	54

はじめに

（１）研究背景

1990年代後半から現在に至るまで、日本各地においてアートプロジェクトや芸術祭の開催が隆盛を極めている。大小合わせても国内に100以上と言われるその活動の先駆けとして位置づけられるのが、本研究の対象である「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ（以下、大地の芸術祭）」である。大地の芸術祭とは新潟県十日町市・津南町を合わせた越後妻有地域で2000年から里山をフィールドに開催されてきた、現代アートの国際展であり、3年に1度のトリエンナーレ形式で開催されるプログラムに加え、通年で作品や施設を運営しており、その開催規模は世界最大を誇る。大地の芸術祭では、自然や文化、食といった地域固有の資源を活かしながら作品や関連プロジェクトが展開されており、行政や市民とも結び付きの強いその取り組みは地域活性化やソーシャル・キャピタル形成の取り組みとして注目を集めるとともに、美術及び文化政策の分野において様々な角度から研究が進められてきた。

そして、とりわけ本論文で取り上げたいことは、大地の芸術祭には開催当初から中心に据える「協働」と呼ばれる取り組みだ。「協働」は文化政策やまちづくりにおける市民参画の場面で度々使用されるが、大地の芸術祭においては、多様な人々が関わる作品制作や運営など、ほとんどの取り組みの中で使用されている。大地の芸術祭における「協働」は、大地の芸術祭の魅力創出に寄与し、地域活性化の取り組みとしても評価される一方で、大地の芸術祭の作品の全てで機能しているとは考えにくく、中には住民に対してマイナスな印象を与えているものもあると筆者は考えている。本研究では、筆者がそのような考えに至ったきっかけでもある作品の1つとしてカサグランデ&リントーラ建築事務所《ポチョムキン》(2003)を取り上げながら、大地の芸術祭における「協働」の取り組みについて主にフィールドワークにて調査を行う。これにより、大地の芸術祭における様々な「協働」の取り組みが、大地の芸術祭および越後妻有地域の発展に加え、他の芸術祭やアートプロジェクト、文化政策の今後を考える上でも重要な意義をもつものとなることを展望する。

（２）先行研究・研究目的

大地の芸術祭に関する研究は、主に住民意識や作品を取り巻く環境に関する定性調査と、経済波及効果や大規模アンケートに基づく定量調査の2つに分けられる。しかしながら、そのどちらもが外部からの調査がほとんどであり、内部の運営に焦点を当てたものはほとんど見られないほか、「協働」に特化して論じた研究は例がない。

したがって、本論文では大地の芸術祭における「協働」の取り組みを運営目線で捉え、その効果を明らかにするとともに、芸術祭と地域の双方において持続可能性をもたらす「協働」のあり方を提示することを目的に研究を行う。

（３）研究方法及び論文構成

本研究では、①大地の芸術祭における「協働」の定義と変遷、②《ポチョムキン》における協働、③《ポチョムキン》における現地調査、④大地の芸術祭と地域の持続可能性、の４つの内容で研究を進める。第１章では、主に文献調査から大地の芸術祭の変遷と「協働」の取り組みを把握し、「協働」の定義を仮定する。第２章では、大地の芸術祭作品《ポチョムキン》における「協働」の実態を明らかにする。第３章では、《ポチョムキン》について集落に対するアンケート調査及びヒアリング調査を行い、作品と集落の関係を明らかにする。そして、第４章では、大地の芸術祭における「協働」の主体に対するヒアリング調査を行い、「協働」の現状とそれが芸術祭と地域にもたらす持続可能性について考察する。最後に、結論として、全ての調査結果を踏まえ、芸術祭と地域の双方において持続可能性をもたらす大地の芸術祭における「協働」のあり方をその定義と共に提示する。

第1章 大地の芸術祭と「協働」

1.1 大地の芸術祭の概要

大地の芸術祭は、新潟県越後妻有地域（十日町市・津南町）にて、2000年から開催されている現代アートの国際芸術祭である。里山の自然をフィールドに世界中から来訪者、アーティスト、サポーターが訪れる。作品は地域の文化や自然に基づいたリサーチベースで展開され、廃校や空き家、私有地等に設置される。運営・制作は美術の知識を持たない住民を含め、多様な人やものを巻き込んで行われ、そのスタイルは美術業界だけでなく地域政策の分野からも注目を集めている。大地の芸術祭の開催によって来訪者の増加や経済波及効果が地域内の各所で見られており、近年では国内でも芸術祭やアートプロジェクトで地域を活性化させる取り組みが多く見られるが、大地の芸術祭はその先駆けとして位置付けることができる。また、大地の芸術祭は3年に1度のトリエンナーレ形式を取っているが、それに加えて通年で鑑賞できる作品や飲食・宿泊施設等を管理・運営しており、1年を通してアートに触れるコンテンツが用意されている。したがって、本論文ではトリエンナーレを含めた通年の取り組みを対象とする。なお、2021年に開催予定であった第8回展は新型コロナウイルスの影響により延期が決定していたが、2022年1月には2022年開催予定で過去最長の145日間の会期日程¹が発表されている。

1.2 大地の芸術祭の変遷

1.2.1 開催まで

現地での調査を進めていくにあたり、大地の芸術祭のこれまでの変遷を一度整理する必要がある。本項では、第1回展開催までの企画段階についてまとめた²。

大地の芸術祭は、2000年の第1回展の構想段階から一貫して北川フラムが総合ディレクターを務める芸術祭であるが、その始まりは1994年に新潟県で策定された「ニューにいがた里創プラン」が契機となっている。これは、1999年の平成の大合併を見据えて近隣市町村での地域活性化の取り組みを行うための施策であり、その内容は当時の新潟県内の122市町村を13の広域圏にまとめ、その広域圏でソフト事業を行うというものである。この政策に際して、大地の芸術祭が開催されている十日町市と津南町（合併前は旧十日町市、旧川西町、旧中里村、旧松代町、旧松之山町、津南町）は十日町広域行政圏として区分されていた。

¹ 開催日程は2022年4月29日（金・祝）～11月13日（日）、火・水曜定休
[2022年「大地の芸術祭」名称・開催日程 決定 - ニュース | 大地の芸術祭 \(echigo-tsumari.jp\)](https://echigo-tsumari.jp)（最終閲覧日 2022年1月7日）

² 北川フラム『大地の芸術祭 <ディレクターズ・カット>』角川学芸出版（2010）を参考に筆者が編集した

そして1995年、新潟県庁地域政策課の渡辺斉により、現在も総合ディレクターを務める北川フラムが参画を依頼される。これには、渡辺がパブリックアートによってまちづくりを行うことを考えており、北川が1994年に東京都立川駅北口の米軍基地跡地にて展開した再開発事業かつアートプロジェクトである「ファーレ立川」に渡辺が着目していたことが背景にある。その後、北川と担当行政職員を中心に始動した「ニューにいがた里創プラン」の十日町広域行政圏版は、1996年に策定した「越後妻有アートネックレス整備構想」の名の下にアートで地域を活性化する4つのプロジェクト「越後妻有8万人のステキ発見」、「花の道事業」、「ステージ事業」、「越後妻有アートトリエンナーレ」を行うこととなった。この時、十日町広域行政圏の市町村を指す「越後妻有」という呼び名も誕生するが、これは行政区分には無い名称で、平安時代の時の「妻有荘」（十日町、川西、中里、津南）と「松之山荘」（松代、松之山）という名称と新潟の旧国名の「越後」を組み合わせたものである。「越後妻有」の名称は平成の大合併後も引き継がれ、今や現行の十日町市と津南町を指す言葉として一般に知られるようになっていく。こうして計画された「越後妻有アートネックレス整備構想」の4つのプロジェクトのうち「越後妻有8万人のステキ発見」、「花の道事業」は他の2つに先駆けて1998年から実施され、「ステージ事業」と「越後妻有アートトリエンナーレ」は本研究の対象でもある「大地の芸術祭」の取り組みである。なお、「ニューにいがた里創プラン」に認定された事業は県が10年間、資金は5億円まで支援するというものであったため、「大地の芸術祭」は当初、10年間の期限付きでスタートした芸術祭ということになる。

「大地の芸術祭」の取り組みが先の2事業に後れを取る形で実施された背景には、越後妻有地域は過疎高齢化の進む里山であることのほか、アートで里山の地域を活性化するという取り組みは当時前例がなかったことで準備に時間を要していたことが要因として挙げられる。越後妻有地域は1年の半分は雪に閉ざされる豪雪地帯で政治にも保守的な一面が見られる地域であったがゆえに、公金を使って現代美術の展覧会を行うことに抵抗を持つ者も多方面に存在していたことで、1999年に開催予定であった第1回展の大地の芸術祭は反対多数のため延期を余儀なくされることとなった。開催までの4年半で会議や説明会は2000回を超え、当時について北川は「反対こそが重要なのだと腹を括ってやり続けるしかなかった³」と記している。

1.2.2 第1回展（2000）～「今年の越後妻有」（2021）までの歩み⁴

ようやく開催まで辿り着いた第1回展（2000）は、会期前半にはほとんど来訪者が訪れず周囲からの批判も少なくなかったが、会期後半には口コミで評判が広まり、徐々に来訪者が

³ 北川フラム『大地の芸術祭 <ディレクターズ・カット>』角川学芸出版（2010）p.26より

⁴ 本項については、大地の芸術祭実行委員会事務局『大地の芸術祭総括報告書』（2000、2003、2006、2009、2012、2015、2018）を元に作成した

訪れるようになったことを北川は述べている⁵。当時の作品は、集落が守ってきた個人の土地に作ることはほとんど実現できず、作品の多くは許可を取りやすい公園や公道、市町村管理の土地とその周辺に設置された。それでも作家は現地下見の後プランを提出し、結果的に153もの作品を越後妻有地域に点在させることができていた。地域との関わりが少ない中でも、場所にこだわり、住民とも交流を図りながら滞在制作を行っていた作家もいたようだ。2002年には「ふるさとイベント大賞（総務大臣表彰）」、「東京クリエイション大賞アートシーン創造賞」を受賞。

第2回展（2003年）には、「ステージ事業」で1998年から構想されていた3つの拠点施設「越後妻有交流館キナーレ（現、越後妻有交流館キナーレおよび越後妻有里山現代美術館 MonET）」、「まつだい雪国農耕文化村センター『農舞台』」、「越後松之山森の学校 キョロロ」が完成する。さらに50を超える集落が作品設置に手を挙げ、一部の作品は個人の土地である田んぼの畦や鎮守さまの敷地、空き家にまで展開するようになっていく。さらに、過疎高齢化によって耕作者がいなくなった田んぼを引き受け、里親制度によって新米を配当する「まつだい棚田バンク」が発足する。2004年に「地域づくり総務大臣表彰（現・ふるさとづくり大賞）」を受賞。

第3回展（2006年）では「空き家プロジェクト」が大きな目玉となった。これには、2004年10月に発生した新潟県中越地震⁶が大きく影響している。新潟県中越地震により越後妻有では多くの住民が持ち家を離れ、空き家が増加していたことから、空き家で作品を公開するプロジェクトが進められた。また、同展は地震という大地の動きから「土」というテーマを掲げて開催され、トリエンナーレのための準備が地震から立ち直る原動力になった集落もあるという。そして、2006年をもって県の施策「ニューにいがた里創プラン」の10年間にわたる支援は終了する。

第4回展（2009年）の開催にあたっては、県からの支援が終了したことで従来ほど行政主導の色合いは強くなく、同時に経済的自立が求められた。2007年にはアート NPO である NPO 法人越後妻有里山協働機構が越後妻有地域に設立され、東京・代官山の株式会社アートフロントギャラリーと十日町市、津南町で大地の芸術祭の企画・実行を行う現在のスタイルが確立された。2007年からは2004年から始まった本祭年以外の夏のプログラムが30日間での開催（2004、2005年はそれぞれ10日間）となり、2008年には冬、春、秋とプログラムが開始され、現在まで続く通年での運営が始まった。トリエンナーレでは約60軒もの空き家・廃校が作品となった。また、十日町市においては、来訪者に対して大地の芸術祭作品及び地域を紹介することを目的に行われる活動に対し補助金を助成する「千客万来事業」がトリエンナーレ毎に事業化された。同年には「第7回オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）」、翌2010年には「地域づくり表彰（国土交通大臣賞）」、2011年には「文化

⁵ 北川フラム『大地の芸術祭 <ディレクターズ・カット>』角川学芸出版（2010）p.29より

⁶ 中越地震は新潟県中越地方を震源として2004年10月に発生した直下型の地震で、最大震度7、十日町市では震度6弱を記録した大規模な自然災害である。越後妻有は震源地から数キロほどしか離れていない地域もあり、多くの被害が確認された。

庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）」を立て続けに受賞した。

第5回展（2012年）は「地域全体がミュージアム」をコンセプトに、過去最多の約110集落に作品が展開され、2003年にオープンした十日町エリアの拠点「キナーレ」が大幅にリニューアルされ、越後妻有里山現代美術館「キナーレ」として再出発する。中央に展示されたクリスチャン・ボルタンスキー《No Man's Land》は中学美術の教科書にも採用されるなど反響を呼んだ。また、前年2011年3月の長野県北部地震、7月には越後妻有地域は新潟・福島豪雨で2度被災しており、復興の意味合いも含んだ開催となった。そして2014年以降「越後妻有 雪花火」が冬プログラムの目玉として登場する（2020年は中止、2022年は開催無し）。

第6回展（2015年）には、上郷クローブ座、清津倉庫美術館、奴奈川キャンパスの3つの廃校が作品としてオープンし、地域に新たな拠点が生まれた。また、奴奈川キャンパスを拠点に「半農半サッカー」で活動する女子サッカー実業団「FC 越後妻有」も発足し、大地の芸術祭の目玉プロジェクトの1つとなった。

第7回展（2018年）には清津峡渓谷トンネルが大規模改修により作品化され、SNSの普及も相まって大きな反響を呼んだ。インバウンドの来訪者およびサポーターも中国を中心に増加し、猛暑にも関わらず全体の入込者数は過去最高を記録する。同年に「グッドデザイン金賞（経済産業大臣賞）」、2019年には「第11回観光庁長官表彰」を受賞した。

そして2021年、本来であれば第8回展の開催年であるが、新型コロナウイルスの世界的な流行により、開催の延期が同年4月に決定する⁷。大地の芸術祭延期のニュースはトリエンナーレ開催に先立ち開催された企画発表会からちょうど1か月後のことであり、同年には北川が総合ディレクターを務める「いちばらアートミックス」、「奥能登国際芸術祭」、「北アルプス国際芸術祭」の開催が1年遅れで予定されていただけに、関係者は衝撃を受けたことだろう。しかしながら、通年でプログラムを実施している大地の芸術祭は、夏のプログラムを例年にはない「今年の越後妻有」として、通常のトリエンナーレ会期よりも長い約3か月もの会期で開催された。「今年の越後妻有」は大地の芸術祭の顔とも言うべき「越後妻有里山現代美術館「キナーレ」」と「まつだい雪国農耕文化村センター『農舞台』」の大幅リニューアルを目玉とし、コロナ対策では十日町市と連携しながらの運営となった。この2大拠点施設のリニューアルは第8回展を見据えてのことであったが、本来の会期に間に合うように行われたため、第8回展を待たずオープンすることとなったのだ。「越後妻有里山現代美術館「キナーレ」」は「越後妻有里山現代美術館 MonET」へと名称を変え、2012年からの常設作品のほとんどが新作に、「まつだい雪国農耕文化村センター『農舞台』」はとくに芸術祭と縁のある作家イリヤ・エミリア＝カバコフの作品に特化した展示室が設けられた。

3年に1度のトリエンナーレは第1回展開催までに約6年もの歳月を要し、度々批判にさらされながらのスタートではあったが、表1のとおり開催規模や入場者数、来場者消費は右

⁷ 「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2021」の開催延期について
https://www.echigo-tsumari.jp/news/20210416_01/（最終閲覧日 2022年1月5日）

肩上がりで 20 年以上も開催を続けてきた。とはいえ越後妻有は 1 年の半分は積雪を考慮しなければならない豪雪地帯で、度重なる自然災害に晒されながらもクオリティや運営スタイルを都度確立することは並大抵のことでは無いだろう。来る第 8 回展は、例年の約 50 日間の会期と比べると 3 倍ほどの会期という長期開催であるが、これには感染症対策を考慮して会期中の混雑を避けることが念頭にある。そして、従来のトリエンナーレであれば施設の休日は設けられていなかったが、長期開催ということもあり 2022 年は火・水曜が休祭日となる。そして何より、プログラム名称「越後妻有 大地の芸術祭 2022」には「トリエンナーレ」という単語が見当たらず、今までのような開催方式ではないことは明らかである。作家が決定した約 100 の新作に関しても、「特に地域との協働による作品の制作・公開時期は、地域の方々や関係機関と相談しながら決定」となる⁸。しかしながら、北川は第 8 回展の開催を控えた 2021 年 2 月の段階で、「8 回目を迎える越後妻有・大地の芸術祭は、作品中心の芸術祭から集落・施設を核とした地域づくりのステージに入りつつあり、現在、10 の拠点施設でさまざまなプロジェクトが進行している⁹」と述べており、第 8 回展ではより地域づくりの側面が増すことが予想される。



(図 1¹⁰) 越後妻有里山現代美術館 MonET 内
レアンドロ・エルリッヒ 《Palimpsest: 空の池》
Photo by Kioku keizo



(図 2¹¹) まつだい雪国農耕文化村センター『農舞台』
Photo by Nakamura Osamu

⁸ 2022 年「大地の芸術祭」名称・開催日程 決定 - ニュース | 大地の芸術祭 echigo-tsumari.jp (最終閲覧日 2022 年 1 月 7 日)

⁹ 「ART FRONT GALLERY | 5 つの芸術祭の現在 北川フラム」
https://www.artfront.co.jp/jp/news_blog/%ef%bc%95%e3%81%a4%e3%81%ae%e8%8a%b8%e8%a1%93%e7%a5%ad%e3%81%ae%e7%8f%be%e5%9c%a8-%e3%80%80%e5%8c%97%e5%b7%9d%e3%83%95%e3%83%a9%e3%83%a0/ (2021 年 2 月 24 日付、最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

¹⁰ 越後妻有里山現代美術館 MonET - 主要施設 | 大地の芸術祭 <https://www.echigo-tsumari.jp/travelinformation/smcak/> (最終閲覧日: 2022 年 1 月 14 日)

¹¹ まつだい「農舞台」 - 主要施設 | 大地の芸術祭 <https://www.echigo-tsumari.jp/travelinformation/nohbutai/> (最終閲覧日: 2022 年 1 月 14 日)

	第1回 (2000)	第2回 (2003)	第3回 (2006)	第4回 (2009)	第5回 (2012)	第6回 (2015)	第7回 (2018)
入場者数(万人)	16.3	20.5	34.9	37.5	48.9	51.1	54.8
参加国数	32	23	40	40	44	35	44
参加アーティスト	148	157	225	約350	310	363	335
作品数	153	220	334	365	367	378	379
展示集落	28	38	67	92	102	110	102
経済波及効果(百万円) [うち消費支出]	12,758 [2,704]	14,036 [1,225]	5,681 [4,354]	3,560 [3,370]	4,650 [4,268]	5,089 [4,518]	6,528 [5,389]

(表1) 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ開催データ¹²⁾

1.3 大地の芸術祭における「協働」

行政主導で始まった大地の芸術祭は「人間は自然に内包される」という基本理念の下、20年以上もの歳月で制作・公開された作品数は1000を超える。3年に1度のトリエンナーレを軸に通年でも200を超える作品や施設の管理・運営を行い、そこに携わる人も地域内外に多数存在し、その関わり方も人それぞれである。大地の芸術祭は都市型の芸術祭とは異なり実行委員に学芸員や大学教授といった有識者陣の参画体制は見られないものの、開催規模の大きさや通年でのプログラム運営、関わり方の多様さに関しては国内の芸術祭でも随一と思われる。そして、大地の芸術祭においては、開催当初から掲げられてきたキーワードの1つに「協働」がある。協働は「同じ目的のために協力して働くこと」という意味を持っており¹³⁾、本来は文化政策やまちづくりの分野で度々使用されてきた。大地の芸術祭では、作家の制作活動に地域住民やサポーター、企業が関わって一緒に作品を完成させることのほか、作品管理や案内、運営を地域全体で受け持つことといった文脈の中で使用されることが多く、北川が総合ディレクターを務める他の芸術祭においても「協働」の語は頻繁に登場する。北川は自身の著書において「地域・世代・ジャンルを超えた協働」¹⁴⁾を大地の芸術祭実行のための思想の1つとして挙げているほか、『希望の美術・協働の夢 北川フラムの40年1965-2004』（角川書店、2005年）の出版など、「協働」は北川自身にとっても重要な意味を持つと考えられる。

ただし、大地の芸術祭における「協働」は、その取り組みにおいて重要なキーワードであるにも関わらず、その定義は明確にされていない。大地の芸術祭では作品選定後、集落との意見を交換しながら制作が進められ、その中で、地域住民の助言により作品の内容が決定したり、住民の要望で作品展示期間が延長されたりすることや、一方で、取り組みに反対する

¹²⁾ 大地の芸術祭実行委員会事務局『大地の芸術祭総括報告書』（2000、2003、2006、2009、2012、2015、2018）より
なお、経済波及効果には建設投資と消費支出で構成される。第1、2回展の数値が大きいのは初期投資分（ステージ事業を含む建設投資）である。

¹³⁾ 『明鏡国語辞典第二判』大修館書店、2016年

¹⁴⁾ 北川フラム『美術は地域をひらく 大地の芸術祭10の思想』現代企画室（2014）p.124より

者の意見も尊重しながら作品と向き合っていくことも北川は重要な「協働」のプロセスであるとしている。また、反対から始まった大地の芸術祭は今や世界的な国際芸術祭の1つに名を連ね、今では地元からの理解や協力も十分にある上、地域の必要なイベントにも指定されている。したがって、大地の芸術祭の20年以上の歴史の中で「協働」も変遷を遂げ、それが芸術祭のコミュニティにも何らかの影響を与えていることも推測される。そのことも踏まえて、次項からは大地の芸術祭における「協働」の定義やその詳細について考察していく。

1.4 協働の種類と主体

大地の芸術祭における「協働」には多様な主体が存在することは先に述べた通りである。先行研究には「大地の芸術祭の当事者」についてソーシャル・キャピタルの観点から研究した澤村（2014）¹⁵や、「協働」と言える取り組みがあった作品に関する多くの文献があるが、「協働」をベースにして考察が進められた例はない。したがって、主に越後妻有地域で行われる「協働」において考えられる主体と取り組みの内容を（表2）にまとめ、主体の中でもとりわけ「協働」を担う組織に関してはその役割や「協働」の在り方を考察した。

番号	主体	「協働」の内容
1	北川フラム	全体のディレクション
2	十日町市長、津南町長	運営方針の協議と決定
3	作家	作品・プロジェクトの構想および制作実行
4	株式会社アートフロントギャラリー	トリエンナーレ企画、作家調整、作品制作
5	越後妻有里山協働機構、FC 越後妻有	予算補助、作品管理、運営本部（美術面）、季節プログラムの企画 実行、広報
6	地域住民	（居住地域内において）作品設置場所の提供、制作協力、作品管理、来訪者の案内やおもてなし
7	鑑賞者	作品鑑賞、アンケートの回答、SNS等への発信
8	行政（文化庁、新潟県）	予算に基づく資金援助
9	行政（十日町市、津南町）	運営（資金・整備面）、集落との仲介
10	サポーター（こへび隊）	運営補助、作品制作・修繕
11	サポーター（オフィシャル サポーター）	協賛金の出資、広報、物品等の補助
12	企業（協力、協賛）	作品の制作、インフラ整備、成果の提供、協賛金の出資

¹⁵ 澤村明『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の十三年 2000-2012』慶應義塾大学出版会（2014）における研究

13	地域の商店、宿泊施設	活気の創出、協賛金の出資
14	観光協会	広報、観光客の窓口

(表 2) 大地の芸術祭 協働の主体

まず、総合ディレクターの北川フラムに関して、参画の経緯はすでに述べてきたとおりであるが、大地の芸術祭の企画・運営を一手に引き受ける人物である。トリエンナーレ企画の中核である作家の選定は、すべて北川が行っている。運営や企画は自身が代表を務める株式会社アートフロントギャラリーや NPO 法人越後妻有里山協働機構のスタッフがある程度は行うが、その最終決定は常に北川の役目である。大地の芸術祭においては1番の重役であるにも関わらず、会期中には自身でツアーを組んでアテンドをすることや、トリエンナーレに向けてオンラインと現地活動を通して芸術祭を学ぶ企画「北川フラム塾」の開催など、周囲への間口も広く構えている。なお、北川は大地の芸術祭の他に「いちばら×アートミックス」(千葉県市原市)、「奥能登国際芸術祭」(石川県珠洲市)、「北アルプス国際芸術祭」(長野県大町市)、「瀬戸内国際芸術祭」(香川県、高知県)の総合ディレクターを務めている。また、北川が代表を務める株式会社アートフロントギャラリーも「協働」の主体として考えられる。アートフロントギャラリーは展覧会や芸術祭の企画運営、アート作品の販売、アートコーディネート、芸術祭におけるアート制作、美術館の運営や美術書籍出版といった、美術全般に関わる企業である。大地の芸術祭では、北川が選定した作家との打ち合わせや作品制作、ガイドブックおよび記録集の出版と、それに伴う企画を主に担当する。トリエンナーレや関連プロジェクトに際しては「妻有担当」の職員が越後妻有まで出向き、現地で業務を行うこともしばしばである。この芸術祭における業務は、北川の手掛ける他の芸術祭も同様に行われる。アートフロントギャラリーは、まだ形になっていない作品やプロジェクトを地域の中で見える化し、現地の業務に手渡す役割を果たしていると言える。

次に、トリエンナーレに際して主催団体として結成される大地の芸術祭実行委員会の組織体制を見ていく。大地の芸術祭実行委員会は、十日町市観光交流課芸術祭企画係に本部が置かれ、実行委員長を十日町市長、副実行委員長を津南町長、名誉実行委員長を新潟県知事が務める。この三者はすべて行政の長であり、大地の芸術祭が公共事業としてスタートした歴史を受け継いでいる。現に、十日町市長や津南町長は総合ディレクターの北川と共にトリエンナーレの概要を決定する権利を持っており、芸術祭開催のための予算も十日町市と津南町では確保されている。また、実行委員会には十日町市観光交流課芸術祭企画係の職員も属しており、感染症対策やサポーター活動調整といった運営のバックアップを主に担当している。作品展開にあたっては、地域の事情に詳しいことを強みに地域住民へのヒアリングを行い、作品誘致意志や設置場所の確保などの調整を行う。

加えて、トリエンナーレの共催団体かつ現地運営を行う NPO 法人越後妻有里山協働機構の体制を整理していく。NPO 法人越後妻有里山協働機構は、「ニューにいがた里創プラン」

の10年間にわたる支援の終了に際して、2008年に設立したいわゆるアートNP0¹⁶である。同団体は越後妻有地域内に複数の事務所を構え、約40人の職員が常勤している¹⁷。なお、常勤職員の大半が地域外から移住してきている上に20～30代であり、60代で若手と言われる越後妻有地域では数少ない、移住者と（一般的な意味での）若手の多い組織である。現地での主な業務は、トリエンナーレの運営、恒久作品の維持管理、通年誘客プログラムやツアーの企画運営、食宿泊施設の運営、グッズ販売、まつだい棚田バンク運営、女子サッカー実業団運営がある。多様な業務を受け持つ常勤スタッフは、FC越後妻有の選手を含め美術館、作品（メンテナンス）、広報、ツアー、農業、飲食、物販、各宿泊施設、サポーターと、担当ごとにチーム編成を行い、兼任しつつもそれぞれの任務にあたる。

大地の芸術祭では恒久作品だけで約200点、トリエンナーレ時は約300以上の作品が地域全域で公開されるうえ、トリエンナーレ時は特別開館作品や飲食施設を中心に地域の方々が非常勤スタッフとして働くため、多い時では合計100人以上が同団体の有償スタッフとして運営に従事することになる。また、同団体は大地の芸術祭の運営を通して地域の魅力を発信し、積極的に集落やサポーターとの接点を作り出していることが特徴として挙げられる。とりわけ、作品制作と維持管理、食宿泊事業、農業、サポーターに関する業務では、ただ効率を求めるだけではなく、多様な関わりしるを模索し、周囲との協力体制を構築する姿勢が見られる。

さらに、同団体には、芸術祭関連業務の他に、「まつだい棚田バンク」と「FC越後妻有」の取り組みがあることも明記したい。「まつだい棚田バンク」は、主に松代地区の休耕田で稲作を復活させ、地域の田園風景を守り地域活性化につなぐ取り組みである。越後妻有は市街地を山が取り囲む盆地であり、松代・松之山地区は棚田が多く存在する。棚田の中には見物客やカメラマンが頻繁に訪れるような名所も数多くあるが、棚田の管理は手間がかかる上に農業従事者の高齢化が進み、棚田管理の担い手は減少する一方であった。棚田での稲作にあたっては、地域の米づくりの師から技術を教わり、収穫した米は同法人が運営する飲食施設での提供やショップ販売のほか、運営費を支出いただいた「オーナー」に配当される。2019年には、稲作を行う団体において作付面積が全国1位（10.1ha）となったこともある¹⁸が、そのことは、それだけ地域内に耕作放棄地があるということも示している。2003年に発足した「まつだい棚田バンク」は「まつだい雪国農耕文化村センター『農舞台』」内に事務所があり、NP0法人越後妻有里山協働機構の設立前は株式会社アートフロントギャラリーのスタッフが一連の業務を担当していた。

「FC越後妻有」は2015年に発足した女子サッカー実業団で、一般的に女子サッカー選手の練習と仕事の兼ね合いが難しいという課題と、地域内の農業の担い手がないという課題を組み合わせで解決する、「半農半サッカー」に取り組むところから始まったチームであ

¹⁶ 芸術活動全般に従事するNP0団体のことを指す。その活動は多岐にわたり、2022年1月時点で明確な定義は無い。

¹⁷ 2021年12月末時点。うち11名は「FC越後妻有」の選手。

¹⁸ 2020年11月「まつだい棚田バンク」スタッフへのヒアリングより

る。実業団チームのほとんどがフルタイムで働いた後に練習を行うのに対し「FC 越後妻有」は半日練習・半日仕事という形態をとり、今や選手たちは農業以外の芸術祭運営業務も担当する。チームは地域の廃校を芸術祭作品にした「奴奈川キャンパス」を拠点に活動し、地域の住民との交流も欠かさない。ホーム試合ともなると地域内から 200 名以上のサポーターがグラウンドに駆け付け、サポーターも「FC 越後妻有」との交流や応援を喜ばしく感じているように思われる。このように、NPO 法人越後妻有里山協働機構は芸術祭運営を中心に地域との活動を盛んに行っており、団体名称に「協働」とあるように、大地の芸術祭における「協働」は彼らが中心を担っていると言っても過言ではないだろう。

そして、大地の芸術祭の取り組みにおいて重視される地域住民の関わり方を見ていく。ここでは、サポーター組織に属する住民ではなく、自らの集落を主な拠点として活動する住民を想定している。大地の芸術祭では作品の設置場所が決まると集落会議が開かれ、アートフロントギャラリーや里山協働機構スタッフにより作品の概要が伝えられる。この時参加するのは集落の役員であり、これが地域住民にとって作品や作家との出会いとなる。そこから集落の役員を通じて、他の住民に作品の内容が広まっていく。なお、大地の芸術祭では集落での作品のほとんどがその土地に根差して作られるため、住民の集落に対する豊富な知識や暮らしの知恵は遺憾なく発揮され、作品によっては制作を手伝うことや、住民の手が入ることを主旨とするものも少なくない。中には作家が集落内で滞在しながら政策を行う例もあるが、近年は新型コロナウイルスの影響により作家の滞在が難しくなっている状況にある。ただ、コロナ以後は連絡手段も多様化・充実化してきたことが高じて、作家がリモートで指示を出して制作するスタイルも採られるようになってきた。さらに作品が完成した後は、地域住民は、今度は作品の受付を行い、来訪者をもお茶や野菜でもてなす。猛暑の中で作品をまわる来訪者にとって、作品での住民との出会いやもてなしは新鮮な体験となり好評なのだ。特に都市部で生活する来訪者にとっては、里山の自然と、そこでの住民との交流は貴重な出来事である。それは地域に長年暮らす住民たちにとって同じことがいえる。北川は、地域住民が芸術祭に協力することに対して「大地の芸術祭では、(中略) 地域の人びとがさまざまな形で手伝う。それが協働だ。その結果、作品は作家ひとりだけのものではなく、地域の人びとの作品になる¹⁹」と記している。住民にとっても芸術祭に関わったひと夏は忘れられない出来事であり、それが自分たちの暮らしてきた集落で起こるのだから当然思い入れは強くなる。そして、自分たちの集落の作品は自分事として捉えられるようになる。「協働」は地域住民の生活と重なり、「協働」があることで地域と作品は長く付き合っていくことができる。そのことはクリス・マシューズ《中里かかしの庭》(2000) や関根哲男《帰ってきた赤ふん少年》(2009) といった、作家と住民が共に「協働」した作品が今でも地域に管理され、愛されているということが何よりの証明であるだろう。

最後に、大地の芸術祭のサポーター組織であるこへび隊の活動は明記しておく必要があ

¹⁹ 北川フラム『美術は地域をひらく 大地の芸術祭の 10 の思想』現代企画室 (2014 年) p. 30 より

る。こへび隊は、大地の芸術祭の第1回目のトリエンナーレに際して北川の呼びかけにより結成された、リーダー不在の、自主的なサポーター組織である。越後妻有や首都圏を中心に、国内外から3000人以上がこれまでに参加し、学生から80代までの幅広い年齢層のメンバーが芸術祭を通じた活動に携わっている。「こへび」という名称は、越後妻有ではへびは神聖で縁起がよい生きものとされており、脱皮しながら大きくなる様子をサポーターが成長する姿に重ね、「力をあわせて大きくなっていこう」という想いを込めて決定された。こへび隊のシンボルマークには、へび6匹が連なって円陣を作る様子が描かれており、モチーフのへびは開催当時の6市町村(十日町市、松代町、松之山町、川西町、中里村、津南町)に重ねられている。最初のこへび隊は東京の美術学生を中心とした組織であり、結成から2ヶ月余りの2000年2月に初めて越後妻有を訪れ「妻有全戸訪問」を実行した。これはその名の通り、越後妻有地域の全世帯に対して大地の芸術祭開催に向けて広報活動を行うというものである。現在と異なり、芸術祭が開催される前の越後妻有は「大地の芸術祭」、「現代アート」に対する知名度は圧倒的に低く、訪問先の住民の風当たりは強かったという。不審者扱いをされることもしばしばだったが、全4回の活動の中でも試行錯誤を重ね、徐々に話を聞いてくれる住民が増えてきた。そもそも、北川による地元への説明が立ち行かなくなっていたことがこへび隊募集の背景にあり、こへび隊はその任務を全うしたといえる。のちにこへび隊について北川は「越後妻有の襷の中に入り込み、芸術祭のベースを作り、アーティストの制作を助け、実際の運営を担うようになった²⁰」と記している。「妻有全戸訪問」を契機にこへび隊は地域に入り、トリエンナーレ会期中は作品受付やツアーガイド、こへび隊主催のイベントの企画・運営などを担ってきた。

加えて、大地の芸術祭には「地元サポーター」という組織があったことも述べていきたい。地元サポーターは、居住地もしくは帰省地が新潟県内として2012年に結成されたサポーター組織である。こへび隊と一緒に芸術祭の運営や、定期的に勉強会も開催しながら活動していた。アーティストやこへび隊の送迎、ツアーガイドなど、地元ならではの知識や経験を活かした活動をしており、「地元」という誇りからか、とりわけ越後妻有在住の地元サポーターは思い入れや結束感の強いメンバーがそろっていた。これまで、こへび隊は里山協働機構、地元サポーターは十日町市が中心となって活動が要請されていたが、第8回展に向けた協力体制強化のため、2021年3月に地元サポーターもこへび隊として再編される。再編後はアートフロントギャラリー、十日町市、里山協働機構要請の3者でサポーターのケアが行われ、活動要請も一括で行われる。また、こへび隊と地元サポーターには長い年月の中で多くの登録が蓄積され、実働人数とのギャップが生まれていたこともあり、再編によって双方のすべての登録人数が解消され、再登録という形で新たなスタートを切った。ただし、再編後の活動は新型コロナウイルスの影響により、現地活動は新潟県内在住のこへびに限定されることがほとんどであった。2021年度の活動の中にはオンライ

²⁰ 北川フラム『大地の芸術祭 <ディレクターズ・カット>』(2010)、p. 82 より

ン形式での研修もあったほか、こへび隊公式 Facebook には県外こへびによる現地活動の再開を望む声が多く見られた。このように、こへび隊は「協働」の基盤を形成し、今なお多くのパワーが結集された重要な組織である。

1.5 協働の事例

では、実際にどのような作品で「協働」と呼ぶべき出来事が起こっているのだろうか。ここでは第3回展（2006年）での作品《うぶすなの家》に着目することとする。

うぶすなの家は十日町市の願入集落にあり、築100年を超える茅葺き屋根の民家を「やきものミュージアム&レストラン」として再生した作品である。願入集落は2004年の越中地震において越後妻有地域では1番震源地に近く、うぶすなの家的前身である民家も被災している。当時の住民が被災を機に十日町市街へ転居し空き家になったところ、地域を代表する大棟梁による調査を経て大地の芸術祭作品となった。うぶすなの家では至る所に焼物作家の作品が埋め込まれているほか、飲食・宿泊もできる施設となっている。願入集落は3世帯のみの集落であるが、周辺の集落から住民が集まり、地域コミュニティの中心として機能している。うぶすなを家の管理・運営はアートNP0である越後妻有里山協働機構が受け持っているが、来訪者を受け入れるときは地域のお母さんたちが掃除や食事提供など一連の接客を行い、その売り上げはお母さん方の賃金として還元される。春秋の雪囲いや雪掘り、屋根の葺き替えの際には地域とアートNP0が一体となって作業を進めていく。かつての住民もうぶすなを家の畑は現在も管理しており、野菜の世話などのために時折訪れている。来訪者を送り出すときはお母さんたちが地域に伝わる民謡を歌って踊るのが名物で、地域の人と密に交流できるという点で大地の芸術祭の中でもとりわけ人気を博している作品の1つである。大地の芸術祭が無ければ中越地震の被災で取り壊されるはずだったうぶすなの家は、芸術祭と地域の双方に持続可能性をもたらしていると言えよう。



(図3²¹) うぶすなの家 Photo by Kawase Kazue

²¹ うぶすなの家 - 食べる | 大地の芸術祭 https://www.echigo-tsumari.jp/travelinformation/e_ubusunahouse/ (最終閲覧日: 2022年1月14日)

1.6 考察

以上のことから、大地の芸術祭における「協働」には、多様な人々の関わり、住民の主体性、外部からの長期的なアプローチ、活動の実施、過程の重視といった複数の要素が含まれる。それらを考慮しつつ、次章以降の研究に進むために「協働」を次のように仮定することとする。

大地の芸術祭における協働とは、「越後妻有地域の実情を都度考慮しながら、作品を取り巻く多様な人々によって大地の芸術祭を実行する主体的な活動全般とその過程」のことである。

この仮定には、「協働」を定義する上で重要と考えられる3つの要素が含まれている。

まず、「越後妻有地域の実情を都度考慮しながら」という点は、大地の芸術祭における作品展示室は地域住民の生活空間であることが背景にある。「越後妻有アートネックレス構想」からトリエンナーレに際した作品設置や運営、第1、8回展の延期に至るまで、その取り組みには地域に寄り添い、地域を元気づけることが根底にある。大地の芸術祭は、反対や批判、自然の脅威とも折り合いをつけながら過疎高齢化の進む地で現代美術の国際芸術祭を継続してきたのであり、その軸にある「協働」の取り組みにおいても、地域と伴走する姿勢が貫かれていると考えた。

つぎに、「作品を取り巻く多様な人々」は、ここでは先に挙げた「協働」の主体を想定している。北川も「地域・世代・ジャンルを超えた協働」を大地の芸術祭の思想の1つとして掲げているように、「協働」は1人では成しえないものであり、大地の芸術祭においては住民や作家、行政など様々な主体が「地域・世代・ジャンルを超え」、同じ環境や瞬間を共にしている。それゆえに、一筋縄ではいかない、けれども化学変化のような画期的な出会いが数多く生まれ、関わった作品は自分事として捉えられる。鑑賞者によって多様な解釈が認められている現代美術同様、「協働」の主体によって多様な関わり方が認められてきたことは芸術祭そのものに深みを与えてきた。したがって、この仮定においても「協働」の主体の多様さは重要であると考えた。

そして、「大地の芸術祭を実行していく主体的な活動全般とその過程」について、大地の芸術祭が地域と密接なかかわりがある以上、その取り組みが主体的でなければ地域そのものが疲弊してしまう可能性がある。何事も効率や統率が重視されがちな現代において、「協働」の取り組みが消極的であったり計算されて行われたりするものでは無かったからこそ、人が人を呼び、地域は元気になる。また、過程を重視していることに関しては、プロジェクトを遂行していくところで集積した様々な考えや行動は唯一無二のものであることと、「協働」の成果はすぐに表れるとは限らないことがその理由として挙げられる。「協働」は作品を取り巻く事情や多様な主体の狭間で絶えず揺れ動きながら行われているた

め、必ずしも正解は無く、失敗や紆余曲折も含めて唯一無二のものになる。そのため、「協働」の意義も刹那的に認識できることは重要ではなく、感じ取るタイミングも作品や人によって様々であると考えられる。

さらに、《うぶすなの家》の事例でも述べたように、「協働」の様式が確立されたものは芸術祭と地域の双方に持続可能性をもたらすことも推測される。この「協働」の仮定と、それを構成する3つの要素を踏まえて、次章以降ではさらに考察を広げていく。

第2章 ポチヨムキンにおける「協働」

本章では、大地の芸術祭作品の1つである《ポチヨムキン》における「協働」の実態を調査すべく、作品、作家、設置集落の3つの角度から概要を整理した。

2.1 作品について

《ポチヨムキン》は、2003年に完成の十日町市倉俣にある大地の芸術祭の屋外作品である。新潟県がハード事業整備を助成する「ポケットパーク事業」によって、カサグランデ&リンターラ建築事務所が制作した。大地の芸術祭に「ポケットパーク事業」が取り入れられた背景には、一般的な公共事業にアートの要素を組み込むことで予算を大幅に変えずとも土木工事・施工が優れたデザインになることや、住民参加で事業が進むことで地元にとって愛着のあるものになるという利点がある。なお、越後妻有地域は日本有数の降雪地であり、例年11月末～4月までは冬支度のため公開が休止される。

《ポチヨムキン》は十日町市の所有であるが、その場所は川と田んぼに挟まれた細長い河川敷で集落所有の土地である。以前は特に若いカップルにとっての楽しい遊歩道だったところ、その後雑木林となり、高度経済成長期の悪弊により、廃棄物の捨て場になっていた。作品はコールテン鋼の壁で全体を覆い隠している構造をもち、内部には白砂利が敷かれた空間が広がっている。所々にはかつての林の木々が残され四季折々の風景を見せるほか、廃材を用いたブランコや東屋が配置されている。

（補足資料）²²

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003

- ・会期：2003年7月20日（日）～9月7日（日）50日間
- ・会場：十日町市、川西町、松代町、松之山町、川西町、中里村、津南町

ポチヨムキン

²² 大地の芸術祭・花の道実行委員会東京事務局編『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003』、現代企画室（2004）より



(図4) 《ポチョムキン》作品内部 筆者撮影

- ・作家カサグランデ&リントーラ建築事務所（フィンランド）
- ・作品番号 N019
- ・制作年 2003
- ・エリア 中里（倉俣集落）
- ・敷地面積 1,500 m² (3,500 × 130,000 × 12,000 mm)
- ・素材 コールテン鋼、コンクリート、白砂利、砂利、木、再生ガラス、再生コンクリート、再生アスファルト、鉄くず、陶器の破片、古タイヤ

2.2 作家について

カサグランデ&リントーラ建築事務所（1998～2003）は、フィンランド出身のマルコ・カサグランデ（1971）とサミ・リントーラ（1969）による建築ユニットである。自然や環境を題材とし、様々な素材を用いた建築的なインスタレーション作品を世界中で発表してきた。

彼らと大地の芸術祭を繋げたのは、他の作品がそうであるように総合ディレクターの北川フラムの存在がある。北川が彼らを知ったのは、サヴォンリンナで発表された《LAND(e)SCAPE》（1999）の写真からである²³（図5）。荒野に4本足の木造の小屋が3軒建ち、のちに燃やされてしまうという、建築とパフォーマンスが融合したインスタレーション作品《LAND(e)SCAPE》について、北川は、「まるで持ち主が都市に去ったせいで打ち捨てられた小屋が、主人の跡を追って都市に向かって歩き出しているかのよう²⁴」と述べており、この作品をきっかけにし



(図5) 《LAND(e)SCAPE》(1999)

²³ 《LAND(e)SCAPE》 <https://rintalaeggertsson.squarespace.com/finland-landscape-1999>（最終閲覧日 2022年1月13日）

²⁴ 北川フラム『大地の芸術祭 <ディレクターズ・カット>』（2010）、p.41-42 より

て第2回展（2003）への出品が決定することになる。その後は、アートフロントギャラリーの担当者によってやりとりが行われ、作品の概要やセット場所が決定していくという流れを辿る。《ポチョムキン》の制作にあたっては、彼らの他に数人のプロジェクトメンバーが北欧やヨーロッパから集い、集落内の旧教員住宅に滞在して進められていた。協働を主とした他の作品のような積極的な働きかけはなかったものの、彼らの滞在制作は住民に認知されていたと考えられる。

なお、作家の1人であるカサグランデは第7回展（2018）の越後妻有アートトリエンナーレにおいて、蒸気に飛び込んで瞑想を行うキューブ型のサウナ作品《Echigo-Tsumari Public Sauna》（2018）を、「カサグランデラボラトリー」という作家集団として出品している²⁵。サウナの構想は、《ポチョムキン》制作時に、その内部に作ることを作家が希望していたが実現しなかった。リントーラとの建築ユニットは解散したものの、《ポチョムキン》完成から15年後の第7回展ではついにサウナを発表することができたのである。カサグランデは、《ポチョムキン》制作当時の構想を諦めてはならず、同じ越後妻有の地で実現することを目指していたと捉えることもできよう。

2.3 集落について

《ポチョムキン》のある倉俣集落は新潟県十日町市に位置し、世帯数66、人口212人（男110、女102、1世帯当たり3.21）で構成されている²⁶。平成の大合併以前は中里村に位置し、大地の芸術祭においては「中里エリア」に区分される。さらに、中里村への合併以前は中魚沼郡倉俣村であり、倉俣集落のある地域は倉俣村の中心を担っていた。当時の倉俣村は「倉俣地域」として機能するようになり、令和3年11月時点では11の集落（小出、西方、西田尻、芋川新田、芋川、倉俣、原町、新里、重地、清田山、中里下山）からなる。

《ポチョムキン》の正面は道路に面しており、両側には河川と田んぼが広がる。周辺には5軒の住宅もあり、作品鑑賞者の他にも住民や釣り人、農業従事者が利用する場所の中に《ポチョムキン》はある。また、道路を挟んで向かい合う形で旧倉俣小学校があったが、2017年に閉校となっている。

2.4 問題提起 地域との関わり方について

しかし、《ポチョムキン》は作品設置から20年近く経過していても、作品が地域にそれほ

²⁵ Echigo-Tsumari Public Sauna - 作品 | 大地の芸術祭 https://www.echigo-tsumari.jp/art/artwork/echigo_tsumari_public_sauna/より（最終閲覧日2022年1月10日）

²⁶ 令和3年6月末時点、住民基本台帳人口／十日町市 tokamachi.lg.jp より（最終閲覧日2022年1月10日）

ど浸透していないという状況がある。

所有は十日町市で、維持管理は NPO 法人越後妻有里山協働機構と集落内の有志団体が行う。2019 年度までは集落活動の一環で作品管理を受け持っていたが、作品管理を集落で行うことに反対意見があった。2020 年度からは集落で《ポチョムキン》に関わるのが難しく、当時の区長が率先して集落活動とは別に管理活動を行っている。2021 年度は 2020 年度の区長を中心とした有志団体「倉俣有志の会」が結成された。「倉俣有志の会」会員は令和 3 年 11 月時点で 10 名であり、年に数回、作品周りの整備を行っている。集落で作品管理を受け持つことが難しくなり、やむなく有志団体が立ち上がったという流れは、果たして「協働」のあり方として望ましいことなのだろうか。

大地の芸術祭では、地域住民が積極的に関わる「協働」を 1 つのテーマとしており、それが来訪者や作家、地域にとって有意にはたらく場面が多いことがさまざまな文献で挙げられてきた。しかしながら《ポチョムキン》における集落内の維持管理活動に関しては、反対や懸念が出ている状況である。本研究に際した事前の調査において、「倉俣有志の会」会員も《ポチョムキン》や大地の芸術祭作品に興味関心があるというわけではなく、維持管理活動に関しては仕方なく携わっているという面が大きいことが分かっている。作品設置当初は、2003 年の倉俣集落の区長である島田東一が積極的かつ継続的に《ポチョムキン》に関わっており、住民たちは彼に導かれる形で活動にも参加していた。しかしながら、高齢になった彼が老人保健施設へ入所したことで、《ポチョムキン》と地域を結ぶキーパーソンが不在となってしまい、現在の維持管理に対する問題が残ったのである。このことは、開催当初は反対多数であった大地の芸術祭が昨今では地域全体で受け入れられるようになったことをマイナスからプラスへの動きであるとする、それとは反対の、プラスからマイナスにはたらく動きと言える。

そもそも、《ポチョムキン》を本研究の調査対象に選定した経緯としては、地元に住む大地の芸術祭サポーターから《ポチョムキン》の話を聞いたことが契機となっている。話を聞いたサポーターによると、《ポチョムキン》をとりまく集落で有志団体が結成されたことは、「協働」の促進として喜ばしいことであるという。しかし、その後、団体のスタッフにも《ポチョムキン》について話を聞くと、同集落での「協働」は良い状態ではないということが明らかとなった。それが上記の作品管理状況である。このような状況を踏まえて、《ポチョムキン》が地域のプラットフォームとして機能していない場合、集落で詳細な調査を行うには地域に縁があるほうが住民からの協力が得やすく、調査者には適していると考えられる。実際に、「協働」の取り組みに関する調査は、積極的な関わりのパターンがあるほうが調査を進めやすく、そのような事例に関しては、北川フラムの著作を初めとして、多くの文献において述べられている。一方で、「協働」が進んでいない集落において問題提起とともに調査が行われた記述はほとんど無い。幸い、筆者は越後妻有地域出身で芸術祭サポーターおよびアート NPO である NPO 法人越後妻有里山協働機構にて長期インターンも経験しており、《ポチョムキン》において調査を進めやすい環境にある。以上のことから、《ポチョムキン》にお

いて、筆者は独自に「協働」に対する考察ができ、調査も可能であると考え、選定に至った。

第3章 《ポチョムキン》における現地調査

本章では、前章の《ポチョムキン》における「協働」の実態を踏まえ、実際に現地でフィールドワークを行い、作品と集落の関係性を明らかにすることとする。

3.1 調査方法

本研究では、《ポチョムキン》と、《ポチョムキン》のある倉俣集落を対象に、以下のよう
な調査を行った。

- ① 作品の性質の分析
- ② 《ポチョムキン》における維持管理活動
- ③ 倉俣集落住民に対する《ポチョムキン》および地域への意識
- ④ アンケート調査で得た結果をもとにしたヒアリング

この4つの調査を行う目的としては、《ポチョムキン》がどの程度地域に浸透しているのか、また、作品の制作や維持管理の段階で、どのような住民の関わり方があったのかを知るためである。加えて、《ポチョムキン》における今後の協働のあり方や、アプローチの方法などを考察していく。

3.2.1 作品の性質の分析

先にも述べたように、《ポチョムキン》は2003年に制作された屋外作品である。十日町市（制作当時は中里村）の倉俣集落につくられた。

大地の芸術祭作品にキャプションが付けられることはほとんどないが、《ポチョムキン》の道路に面した場所にはキャプションが付けられている。また、作品の解説は「大地の芸術祭の里」公式HPやスマホ向けアプリのほか、トリエンナーレ毎のガイドブックおよび記録集に掲載されている。以下、公式の作品情報を一覧にした。（表3）

キャプション	廃材を用いて作られる禅庭、ブランコ、オープンテラスなど性格の異なるさまざまな空間で構成された公園。作家は、近代化の過程で人間が自然から離れていく問題をテーマに作品を発表してきた。自然豊かな中里村では、鉄、重工業という人間の技術を象徴する要素をつかって、自然と人間が落ち合う場所、環境について思いをはせるような空間をつくりだした。 この公園は、作家及びフィンランド、ノルウェー、フランス、イギリ
--------	---

	ス、プエルトリコ、アラスカ、日本のボランティアスタッフの参加により完成された。
「大地の芸術祭の里」公式 HP スマホアプリ「大地の芸術祭の里」 記録集（2003）	私にとってポチョムキンは、革命の出発点だ。ポチョムキンが頭から離れることはないし、この革命が私をどこへ向かわせるのか見続けている。ポチョムキンは、現代人が自然とどう関係を持つのかという問題の分岐点を示している。人間は、テクノロジーの世界の中でどうしたら存続できるのかという問題に対する長期的な解答を持っている。しかし一方で地球を破滅させるあらゆる手段をも手にしている。建築家、アーテュリスト、都市計画や環境計画に携わる者、そしてヒューマニストは、今この分岐点において、自分たちの役割と責任を見つけないといけない。自然を取り込んでいるポチョムキンは、現代人と自然の関係について考えるポスト産業時代のアクロポリスとして佇んでいる。私はポチョムキンを、昔ながらの田んぼと川の間に位置する、神社へのまっすぐな軸を持った、文化的なごみ捨て場と考えている。
ガイドブック 2003	《ポスト・インダストリアル・メディテーション》 自然、農業、工業の3つの要素からなる公園。コールテン鋼の壁に囲われ、壁の内部はありのままの自然や廃材を用いて作られる禅庭、ブランコ、オープンテラスなど性格の異なるさまざまな空間で構成される。作家は、近代化の過程で人間が自然から離れていく問題をテーマに作品を発表してきた。自然豊かな中里村では、鉄、重工業という人間の技術を象徴する要素をつかって、自然と人間が落ち合う場所、環境について思いをはせるような空間をつくりだす。会期中は、住民とこへび隊によるお茶のサービスやイベントを開催する予定。
ガイドブック 2006	釜川の土手に立つ巨大なコールテン鋼の壁。ゴミが不法投棄されていた場所が、禅庭、ブランコ、東屋など性格のちがう空間をもつ楽しい公園へと変貌した。作家は「文化的なゴミ捨て場」と呼ぶ。
ガイドブック 2009	釜川の土手に立つ巨大なコールテン鋼の壁。かつての子ども遊び場に、長年ゴミが不法投棄されていたが、禅庭、ブランコ、東屋など趣の違う空間が連なる美しい公園へと変貌した。
ガイドブック 2012	釜川の土手に立つ巨大なコールテン鋼の壁。長年ゴミが不法投棄されていた場所を、禅庭、ブランコ、東屋などの並ぶ美しい公園に変えた。 イベント（E024） ニブロー「See [シーソー] Saw」 今年の岸田戯曲賞を受賞した演出家・振付家の矢内原美邦が率いるニブローが、神社を中心に創作。地域の伝承などをテーマに、地域と協働

	し、作品を創り出す。 ・公演 2012 年 8 月 24 日（金）、25 日（土）19:00~20:00 定員 200 人、料金 一般 2500 円ほか 演出＝矢内原美邦、映像＝高橋啓祐、舞台美術＝カミイケタクヤ、音楽＝スカンク、会場＝ポチョムキン/矢放神社 ・映像展示とパフォーマンス 8 月 18 日（土）、19 日（日）12:00~16:00 料金無料、会場＝ポチョムキン
ガイドブック 2015	釜川の土手に、巨大なコールテン鋼の壁が連なっている。禅庭やブランコなど遊具のある広場、東屋、木のベンチなど顔つきの異なる要素が一体となった公園だ。周囲の景観を巧みに取り入れたランドスケープは、フィンランドの建築ユニットによってデザインされた。
ガイドブック 2018	釜川の土手に、巨大なコールテン鋼の壁が連なりそびえ立つ。まるで私たちに自然とどう対峙するかという問題を提起するかのように。ここは、現代人と自然との関係について考える、ポスト産業時代のアクロポリスであろう。そのうえで、制作した建築ユニットは、「ここは文化的なゴミ捨て場である」と表明する。

（表 3）《ポチョムキン》の作品解説

以上の作品解説は、大きく分けて 2 つの性質に分けることができる。1 つは、作家の視点で作品を語ったもの、もう 1 つは、出版者の視点で客観的に作品の要素をとらえたものである。前者は「大地の芸術祭の里」公式 HP 及びスマホアプリ「大地の芸術祭の里」、記録集 2003 に見られる。そして、その他の文章は後者である。前者の内容は抽象度の高い文章ながらも作家のコンセプトをより感じさせる一方、後者の内容は、作品の構成要素とゴミ捨て場であった歴史の記載が目立ち、多くの人が作品の基本情報を理解しやすいものとなっている。また、後者の文章には複数のバリエーションがあるが、どれも内容は似通っていることが分かる。

前者から読み取れることは、《ポチョムキン》は問題提起の性質を持つ作品であるということである。「現代人が自然とどう関係を持つのかという問題」、「ポチョムキンが頭から離れることはない」とあるように、エネルギーの変換と生産消費の時代を経て我々が直面している、人類の存続と環境破壊の問題は作家にとって重要なキーワードであることが分かる。自然に囲まれた環境の中にコールテン鋼やタイヤといった産業革命の賜物とも言うべき要素を配して、作家は《ポチョムキン》を通じて将来の産業の可能性を鑑賞者に問いかけている。

後者の複数の記載からわかる作品の構成要素としては、①巨大なコールテン鋼の壁、②禅庭、③ブランコ、④オープンテラス、⑤東屋、⑥木のベンチが挙げられる。なお、④オープンテラスと⑤東屋は同一のものと予想される。一貫して「公園」と記されていること

から、《ポチョムキン》は人々の集まる空間を想定して制作されたことが分かる。また、「性格の異なるさまざまな空間で構成された」や、「趣の違う空間が連なる」、「顔つきの異なる要素が一体となった」とあることから、複数の要素が混じり合って1つの作品空間を演出することが重視されており、作家の建築家としての一面も垣間見える。

また、作品タイトルに使用された「ポチョムキン」という言葉については、明確な参考文献は記されていない。しかしながら、「ポチョムキン」は「ポチョムキン号の反乱」および映画『戦艦ポチョムキン』でその名が知られているように思われる。ポチョムキン号（正式名称 ポチョムキン＝タヴリーチェスキー公）は実在したロシア戦艦で、将校との対立の中で水兵が起こした反乱は市民にまで伝播し、ロシア第1革命期で最も重要な事件の1つとされている。その様子を映画化したものが1925年に発表された映画『戦艦ポチョムキン』である。なお、作家ユニットの出身国であるフィンランドはロシアとも距離が近い。ポチョムキン号の反乱と同時期にはロシア化政策の中でロシア帝国による文化統制が行われていた。フィンランドはロシア第1次革命後に自治を取り戻していることから、作家は「ポチョムキン」や「反乱」が身近なテーマであったことが想像できる。そして、ポチョムキン号の出来事と、自然と人間の関係性を想起させる作家の作風とが融合して生み出されたのが《ポチョムキン》なのだろう。《ポチョムキン》の解説の中で、唯一作家の記述と思われるのが公式HPおよびアプリ、2003年記録集に記載された文章であるが、そこに書かれた「ポチョムキン」が芸術祭作品を指しているとすれば、「私にとってポチョムキンは、革命の出発点だ。」という記述からは、「ポチョムキン号の反乱」と通じる部分があり、作家はポチョムキン号の一件を意識していたことが考えられる。

また、現在のヨーロッパにおいて「ポチョムキン」は、「見せかけのもの」という意味で使われている²⁷。確かに、《ポチョムキン》は、作品設置前はごみの不法投棄があったような人の立ち入らない場所であった。今でこそ神聖な雰囲気をも感じさせるが、かつての歴史も消えることはなく、作家自身も作品を「ゴミ捨て場」と表現している。作品自体は豊かな自然環境の中にあるが、作品空間に置かれた古タイヤや鉄くず、陶器などは、人々が生産して消費し、そして廃棄するはずだったものたちであり、さらにそれらを人工物のコールテン鋼で覆っている。このことから、《ポチョムキン》は「ゴミ捨て場」の不穏な雰囲気を美しい瞑想空間で払拭した「見せかけのもの」とであるという作家の主張とも受け取ることが可能であろう。

さらに、作品公開時は《ポチョムキン》ではなく、《ポスト・インダストリアル・メディテーション》という作品名であった²⁸。この作品名を和訳すると「産業時代以後の瞑想」となり、《ポチョムキン》が瞑想空間の役割を持っていたことがうかがえる。先にも述べたように、やはり現代人の営みと自然の関係を考えさせる狙いがあるのだろう。なお、「ポ

²⁷ 「ポチョムキン村」は実在したか：はりぼての村に関する神話の背景 - ロシア・ビヨンド rbth.com (最終閲覧日：2022年1月10日)

²⁸ 大地の芸術祭・花の道実行委員会東京事務局『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003 ガイドブック』大地の芸術祭・花の道実行委員会東京（2003）

「ポチヨムキン」以前のタイトルは 2003 年のガイドブックにのみ記載されており、作品入口の看板や同年の記録集には「ポチヨムキン」とあることから、作品タイトルの変更はガイドブック校正後から 2003 年の会期の間になされたことが分かる。

3.2.2 《ポチヨムキン》における維持管理活動

《ポチヨムキン》は屋外作品であり、定期的なメンテナンスを必要とする。空間を取り囲むコールテン鋼は維持がたやすい性質を持っているが、ブランコやベンチは冬季の積雪に備える必要がある。その上、内部は複数の要素が集合しており、葉を落とす樹木を携えていたり、汚れやすい白砂利や再生ガラス片を敷いていたりすることから、他の屋外作品よりもメンテナンスの頻度は高い。大地の芸術祭作品における維持管理の主体については、主に携わっているのは NPO 法人越後妻有里山協働機構であるが、トリエンナーレ会期外の通年展示の屋外作品は 200 点を超えるため、そのほとんどが設置集落との合同で作品を維持している。NPO 法人越後妻有里山協働機構が受け持つ維持管理の内容は、主に専門的な知識や繊細な作業が必要とされるものであるのに対し、集落が受け持つ活動は誰でもできるような、比較的易しいが数人の手が必要なものが多い。《ポチヨムキン》では、NPO 法人越後妻有里山協働機構は再生ガラスの清掃、集落は春秋の設営・撤去作業に加え、草刈りや落ち葉掃きを行う。集落で行った維持管理活動については、同 NPO 法人へ報告書を提出し謝礼を受け取る形を取っている。また、2020 年 9 月 30 日には、フラム塾としてこへび隊を招聘して作品清掃ワークショップが行われた。その際には、関わりが希薄となっていた作家の 1 人であるサミ・リンターラからのビデオレターも届いた。《ポチヨムキン》は 2003 年の完成以後、作家の手を離れてもなお倉俣集落やサポーターの協力を得ながら約 20 年間維持されてきた。

ただ、先にも述べたように、《ポチヨムキン》と倉俣集落の関係性は良好とはいえない。集落で《ポチヨムキン》維持管理を受け持っているのは「倉俣有志の会」という、集落の 50～70 代の男性 10 人によって構成された団体が受け持っているが、2021 年に発足した新しい組織である。「倉俣有志の会」が発足した背景には、生業もある中で作品の維持管理に関わることが負担となり、活動に対して懸念の声を上げる住民が出てきたことがある。その結果として、集落の活動としての作品管理は 2019 年度で取りやめとなってしまう。2020 年度は 2019 年度の区長を中心として有志で試験的に維持管理を行い、それが組織化したものが「倉俣有志の会」ということになる。「倉俣有志の会」の代表は、2019 年度の区長が任命され、他のメンバーも代表が中心となって集められた。その活動は《ポチヨムキン》に加え、旧倉俣小学校の維持管理も行い、1 年の間には必要に応じて開催される会議と年に 3 回の全体作業、それに加えて 2～3 回は参加可能なメンバーのみでの活動がある。しかしながら、有志の会といえども《ポチヨムキン》や大地の芸術祭に愛着のある者が集まったわけではなく、代表本人も維持管理活動について「作品に興味があるわけではないが、他にやる人もお

らず、このまま放っておくわけにはいかないから²⁹」と述べている。

そもそも、《ポチョムキン》は集落の住宅街から離れているうえ、十日町市街地とは反対の方向にある。作品のすぐ道向かいにある倉俣小学校も閉校となり、通勤や買い物といった住民の生活において、作品が目に残ることがより少なくなっているのだ。休日ともなれば鑑賞者は訪れるが、作品近くに住民がいなければ、鑑賞者を目にしたり、作品から対話や交流が生まれたりといったことがない。記録によると、《ポチョムキン》や集落をとりまく環境で大地の芸術祭と接点があったのは、第5回展（2012）でのニブロールによる協働パフォーマンスイベントが最も新しい。そこでは、地域の老若男女から協力を得て、バックアップはもちろんのこと出演までも集落の住民が関わる機会があった。その後、2回のトリエンナーレにおいてはそのような活動は見られず、3年に1度の会期中も集落全体が芸術祭ムードになることは無かった。

以上のことから、《ポチョムキン》と倉俣集落の関係性は、維持管理と親密度の2つの面で課題を抱えている。

3.2.3 倉俣集落住民に対する《ポチョムキン》および地域への意識

先行研究

まず、大地の芸術祭と住民の関係性を探るための先行研究としては2000年から2006年にかけて行われた勝村（松本）らの研究（2008）がある。ここでは、参与観察、インタビュー、アンケートの3つの調査方法を用いており、とりわけアンケート調査では2000年から2006年のトリエンナーレ毎に越後妻有地域全域で調査を行っている。勝村（松本）らのアンケート調査は芸術祭の効果と評価方法を検討するもので、調査時期が《ポチョムキン》制作時期とも重なるほか、対象を住民とする点で本研究とも近い立ち位置にあることから、本研究において有用性が高いと考えた。

勝村（松本）らのアンケート調査に対する住民の回答では「芸術祭地域のもたらした具体的な変化については総じて『変わらない』が多い」とするものの、「地域に、様々な肯定的な変化をもたらすには、アーティストやボランティアの役割が重要であり、同時に、作品のクオリティも影響を与えている」ほか、「作品制作過程に携わった内外の人々の熱意が、地域内に好ましい変化をもたらす重要な働きをしている」ことが明らかとなっている。また、地域住民が芸術祭に対して労働的、金銭的に支援することについて「協力」という言葉を用いており、「協力を軸としたクロス集計」においては、住民が「協力」することに関して「地域が協力的であるほど、地域内に好ましい変化がおこっている」と考察している。「好ましい変化」の具体例には、地域のまとまりの向上や行事の盛り上がり、地域への愛着の増加が

²⁹ 倉俣有志の会会長へのヒアリングより（2021年11月）

挙げられている。

また、集計にあたり、勝村（松本）らは旧市町村（十日町地区、川西地区、中里地区、松代地区、松之山地区、津南町）ごとの狭い範囲においてもクロス集計を行っている。地区を軸としたクロス集計の項目は「芸術祭への個人的な協力」、「作品が地域の伝統・歴史を反映していると思うか」、「新しい知り合いができたか」、「地域内に好ましい変化があったか」の4つであり、この項目の結果は、十日町地区、川西地区、中里地区においては肯定的な回答が少ないのに対し、松代地区、松之山地区、津南町では肯定的な回答が比較的多くみられる。これには、前者が十日町市街地に近い集落が多く、越後妻有地域の中では比較的都市的な生活を送っているのに対し、後者は市街地とは離れた中山間地の集落が多く、農村的なコミュニティの中での生活を送っていることが要因の1つであると予想される。大地の芸術祭では、作品の制作や受付といった仕事を集落単位で各区長から任されることがほとんどであり、この場合、農村的なネットワークが強力な方が住民の関わる機会が創出されやすい。なお、《ポチョムキン》のある倉俣集落は「中里地区」に含まれ、14集落のうち2番目に回答数が多く、全体の13.2%を占める。中里地区におけるクロス集計の結果は、肯定的な回答が少ない前者グループに分けられるが、倉俣集落の住民の1人は「この辺り（倉俣集落）は農業をしている家が多く、（農業がとりわけ盛んで）隣接の津南町とも競っている」と述べており、農村的ネットワークを持つ集落もあることが予測できる。しかしながら、当時の中里地区には拠点となるような大型作品や地域の拠り所でもあった学校を活用した作品が他地区に比べて少なく、それにより集落や世代、ジャンルを超えた協働や大がかりな仕事への誘導も多くなかったことが推測される。したがって、「協働」が行われる作品の規模の違いも回答結果に表れてくることが考えられる。

また、この研究では「協働」という語が使われている箇所があることにも注目したい。勝村らの事前調査において各区長へのロングインタビューの結果、「地域内の『運営』と、地域内外での『交流』が協働を促進した」ことが明らかとなっており、これは本研究においても重要なテーマである。

3.3 アンケート調査

そして、筆者が行ったアンケートは、《ポチョムキン》と倉俣集落における協働の実態と、《ポチョムキン》や地域に対する住民の愛着の度合いを明らかにすることを目的とするものである。回答期間は2021年8月5日（木）～8月15日（日）の11日間、倉俣有志の会会員からの協力を得つつ実施した。

アンケートは全て紙上での回答とし、配布にあたっては倉俣集落の全世帯に対して訪問、もしくは不在の場合にはポストイングの形式を取った。集落の世帯人数が平均で3.20であることから、1世帯当たり3部のアンケートを同封し、回答可能な方に答えてもらう

こととした。回収は倉俣有志の会会員に行っていただき、一度不在だった世帯には筆者が後日訪問する形とした。

- ・ 質問項目数 27
 - ・ 配布数 依頼時点で不参加を表明した家庭および空き家を除く 63 世帯（180 部）
 - ・ 回答数 83（1 人×19 世帯、2 人×23 世帯、3 人×6 世帯）
- うちヒアリング許可人数 11

質問項目は 27 設けており、63 世帯（180 部、依頼時点で不参加を表明した家庭および空き家を除く）への配布から 83（1 人×19 世帯、2 人×23 世帯、3 人×6 世帯、計 48 世帯）の回答を得ることができた。アンケート回答数が 83 であったことに関して、クロス集計が不可能な数字となつてはいるが、そもそもの人口が約 200 人かつ旧中里村の生産年齢人口が全人口の半数以下であることを考慮すれば、十分住民からの協力を得ることができたのではないだろうか。また、1 世帯当たりの配布数も妥当な数であったと思われる。アンケートの配布時には、アンケート本体の他に、アンケートの趣旨や回答方法を記した依頼文と筆者を紹介するチラシを同封し、筆者本人が各世帯を訪ねて配布した。回収時には、集落の住民でもある「倉俣有志の会」会員に協力を仰ぎ、回答者は見知った顔の人へ回答用紙を渡す、という丁寧な方法を取ったことも回収率の向上には効果的であった可能性が高い。その成果として、アンケート末尾において任意で募集したヒアリング調査に応じていただいた住民は回答者のうち 10 名にものぼる。

回収率は部数では 46.1%と半数を割っているが、世帯数では 76.1%となり、ほとんどの世帯からの回答を集計できたことになる。配布部数は 180 部ではあるが、2021 年 7 月末時点での倉俣集落の人口は 211 人であり、配布した世帯の中には 1 人から 4 人以上の世帯も含まれていることを考慮すると、部数よりも世帯での回収率がより有効な値として考えられる。

アンケートの内容と結果は以下の通りであり、サンプル数が少ないことから単純集計の結果のみにより考察を進めた。

アンケート結果

属性（①～④）

回答者の属性について、男女比は偏りなく回収することができた。倉俣集落では国勢調査においても男女比の差は大きくなく、今回のアンケート調査は回答者の性別を絞るものではなかったということが明らかとなった。

年齢については、60 代および 70 代の回答者で全体の半数以上を占める結果となった。集落ごとの年齢別人口のデータがなかったため、国勢調査の結果は旧中里村の区分にはなるが、ここでも 60 代・70 代の人口が全ての年齢区分の上位 2 つを占めていることから、年齢においても正当性の高い結果を得ることができた。また、漢字や文章校正の関係でアンケー

トを回答することが難しい 10 代未満を除き、全ての年齢区分で回答を得ることもできた。このことは、アンケート回答期間にお盆を入れており、そのうえ、お盆期間には雨が多かったことや新型コロナウイルス流行下であったことで、学生や労働者就労者も家庭で過ごす時間が例年よりも長く、より多くの世代の住民にとって、アンケートにが目に留まりやすい環境であった可能性が高いことも影響していると考えられる。

回答者の職業は、回答者の割合が多い順に、無職、農業、会社員という結果となった。この結果に至った背景として、先に挙げた回答者の年齢が大きく影響していると推測できる。回答者の半数以上を占める 60 代、70 代は全国的に見ても企業をリタイアした人が多く、農業が盛んな倉俣集落では、定年後に農業に携わることも容易に考えられる。会社員の内訳についても、生産年齢人口にあたる世代が、60 代、70 代の次に回答者の割合が多い。そのため、職業に関する結果も妥当であると考えられる。

そして、倉俣集落での累計居住年数は、51 年以上にわたり倉俣集落で過ごしている住民が約 4 割を占める結果となった。この項目は、累計居住年数が長ければ集落の歴史や文化に関する知識や愛着にも繋がり、《ポチョムキン》制作前後を知る住民がどの程度存在するかを計る指標にもなってくる。年齢の項目と照らし合わせると、50 歳以上の回答者の約半数が、誕生から倉俣集落に住み続けていることになる。また、10 代未満～10 代の回答者は 6 名だが、倉俣集落の累計居住年数が 20 年以下の回答者は 18 名（21.7%）であることから、大地の芸術祭開催以後に移住してきた回答者は少なくとも 12 名（14.5%）、《ポチョムキン》以前を知らない回答者は、倉俣集落累計居住年数が 20 年以下の回答者数と概ね重なるため約 2 割にのぼることが分かる。

①性別	回答数	国勢調査
男	40 (48.2%)	52.1%
女	42 (50.6%)	47.9%
どちらでもない	1 (1.2%)	0%
計	83 (100%)	100%

②年齢	回答数	国勢調査(旧中里村)
10 代未満	0 (0%)	6.2%
10 代	6 (7.2%)	8.3%
20 代	3 (3.6%)	6.2%
30 代	4 (4.8%)	8.0%
40 代	5 (6.0%)	10.1%
50 代	14 (16.9%)	12.6%
60 代	23 (27.7%)	16.7%
70 代	23 (27.7%)	14.2%
80 代	3 (3.6%)	11.6%
90 代以上	2 (2.4%)	6.0%
計	83 (100%)	100%

③職業	回答数
-----	-----

会社員	18 (21.7%)
自営業	6 (7.2%)
農業	19 (22.9%)
学生	6 (7.2%)
主婦	2 (2.4%)
パート・アルバイト	2 (2.4%)
病院・介護職	2 (2.4%)
無職	26 (31.3%)
その他	1 (1.2%)
無回答	1 (1.2%)
計	83 (100%)

④倉俣累計居住年数	回答数
10年以下	6 (7.2%)
11～20年	12 (14.5%)
21～30年	3 (3.6%)
31～40年	21 (25.3%)
41～50年	8 (9.6%)
51年以上	33 (39.8%)
計	83 (100%)

《ポチョムキン》との関わり (⑤～⑩)

次に、回答者と《ポチョムキン》との関わりを明らかにする。《ポチョムキン》について「よく知っている」、「まあまあ知っている」と回答した人は全体の9割を超える。その中で作品内部に「何度も入ったことがある」、「入ったことがある」と回答した人は全体の8割強と、知名度にはやや劣る結果となっている。しかしながら、《ポチョムキン》が大規模屋外作品であることを鑑みても、里山の過疎高齢化地域において現代アート作品へのアクセス率がここまで高いという事実は稀なことであろう。

たが、《ポチョムキン》制作の背景について、「《ポチョムキン》が倉俣地区の歴史・文化と関係があることを知っているか」という問いに対して、「ほとんど知らない」、「全く知らない」と回答した人は全体の8割以上にのぼる。このことから、《ポチョムキン》を知っており内部に入ったことがある住民でも、そのほとんどは作品と地域との関連性まで触れることは無かったということが明らかとなった。また、《ポチョムキン》が設置された場所に「廃棄物の不法投棄があった」ことを知っていたのは回答者のうち3割を超え、さらに、実際にその光景を「見たことがある」と回答したのは全体の2割を超える。回答者の約8割が《ポチョムキン》制作以前から倉俣集落に居住していることを考えると、廃棄物の不法投棄に対する認知度はそこまで高くなく、不法投棄の規模も地域の中で大きな問題になるほどではなかったことが想定される。

⑤《ポチョムキン》の存在を知っているか	回答数
よく知っている	42 (50.6%)
まあまあ知っている	33 (39.8%)
ほとんど知らない	3 (3.6%)
全く知らない	5 (6.0%)
計	83 (100%)

⑥《ポチョムキン》の内部に入ったことがあるか	回答数
何度も入ったことがある	38 (45.8%)
入ったことがある	35 (42.2%)
入ったことはない	10 (12.0%)
計	83 (100%)

⑧《ポチョムキン》ができる以前に、廃棄物の不法投棄があったことを知っているか	回答数
よく知っている	10 (12.0%)
まあまあ知っている	19 (22.9%)
ほとんど知らない	22 (26.5%)
全く知らない	30 (36.1%)

⑦《ポチヨムキン》が倉俣地区の歴史・文化と関係があることを知っているか	回答数	無回答	2 (2.4%)
よく知っている	2 (2.4%)	計	83 (100%)
まあまあ知っている	11 (13.3%)		
ほとんど知らない	40 (48.2%)	⑨《ポチヨムキン》ができる前の土地にごみがあるのを見たことがあるか	回答数
全く知らない	28 (33.7%)	見たことがある	20 (24.1%)
無回答	2 (2.4%)	見たことはない	32 (38.6%)
計	83 (100%)	分からない	29 (34.9%)
		無回答	2 (2.4%)
		計	83 (100%)

次に、《ポチヨムキン》に対する印象を調査していく。「《ポチヨムキン》を気に入っているか」という問いに対しては、「どちらでもない」と回答した住民が最も多く4割強を占める。「とても気に入っている」、「まあまあ気に入っている」と肯定的な回答をした住民が約3割、「あまり気に入っていない」、「全く気に入っていない」と回答した住民は約2割という結果となった。また、印象の根拠として挙げられる作品の特徴には、「雰囲気」「見た目」と回答している住民が多く、より密度の濃い鑑賞体験を促す「作品の背景事情」、「作品での経験」と回答した住民はそれぞれ1割にも満たない。「その他」には自由記述も設けており、「芸術が良く理解できない」、「役員だけが大変な思いをする。地域にはお金が入らない」といった声もあり、ネガティブな回答が目立った。

加えて、《ポチヨムキン》の詳細な印象を挙げると、プラスの印象を表す項目では「静か」「落ち着く」という回答が多く、《ポチヨムキン》が瞑想のための空間であることをよく表した回答となっている。一方でマイナスな印象を表す項目では「こわい」、「奇妙だ」という回答が多い。「きれい」、「みずぼらしい」という正反対の項目もあるがどちらも回答数は多くはないにせよ、どちらも回答者が一定数存在する。《ポチヨムキン》の維持管理を集落の活動として受け持っていることや、美術作品を「きれい」と思う風潮があることを考慮すると、この結果は意外性がある。また、「その他」を回答した人の中には「視界が遮られるのが惜しい」、「何だろうという違和感と、しっくりしているという印象」といった記述があり、視界が遮られることや、違和感を感じることなど、「こわい」、「奇妙だ」といったマイナスな印象に対する具体的な根拠が提示された。なお、この問いでは複数回答可としており、約9割の回答者が答えていることを見るに、「《ポチヨムキン》を気に入っているか」という問いで「どちらでもない」と答えた約半数の回答者も、何らかの印象を《ポチヨムキン》に対して抱いていることが明らかとなった。

さらに、「《ポチヨムキン》が完成する前後で地域に対する印象は良くなったか」という、作品が地域に対して与える印象に関する問いには、「変わらない」の回答が最も多く全体の4割を超える。これには、住民が実感できるレベルでの変化がなかったことや、作品完成から長い年月が経っていることも背景としては考えられる。「とても良くなった」、「良くなった」の回答も2割近くあり、作品によって地域の印象が良くなっていることを実感する住民

がいる一方で、地域の印象が「悪くなった」と回答する人がいることもまた事実である。

⑩《ポチョムキン》を気に入っているか	回答数
とても気に入っている	5 (6.0%)
まあまあ気に入っている	20 (24.1%)
どちらでもない	38 (45.8%)
あまり気に入っていない	10 (12.0%)
全く気に入っていない	7 (8.4%)
無回答	3 (3.6%)
計	83 (100%)

⑪《ポチョムキン》を気に入っている／いない根拠	回答数（複数回答可）
見た目	23 (27.7%)
作品がある場所	14 (16.9%)
雰囲気	30 (36.1%)
作品の背景事情	8 (9.6%)
作品での経験	4 (4.8%)
その他	4 (4.8%)
無回答	19 (22.9%)
計	102 (122.9%)

⑪その他内訳（芸術が良く理解できない、どちらでもない、役員だけが大変な思いをする。地域にはお金が入らない）

⑫《ポチョムキン》について、どのような印象を持っているか	回答数（複数回答可）
きれい	7 (8.4%)
静か	29 (34.9%)
落ち着く	16 (19.3%)
楽しい	0 (0%)
真面目だ	0 (0%)
面白い	7 (8.4%)
みずぼらしい	6 (7.2%)
騒がしい	0 (0%)
こわい	12 (14.5%)
奇妙だ	17 (20.5%)
その他	6 (7.2%)
無回答	10 (12%)
計	110 (132.5%)

⑫その他内訳（視界が遮られるのが惜しい、何だろうという違和感と、しっくりしているという印象、暗い、少しこわい、重い）

⑬《ポチョムキン》が完成する前後で地域に対する印象は良くなったか	回答数
とても良くなった	1 (1.2%)
良くなった	14 (16.9%)
変わらない	36 (43.4%)
悪くなった	2 (2.4%)
とても悪くなった	0 (0%)
分からない	26 (31.3%)
無回答	4 (4.8%)
計	83 (100%)

そして、《ポチョムキン》における他者との関わりについて、「制作にあたり、行政や近隣住民からの説明を聞いたことがあるか」という問いに対しては、20 年近く以前のことであったために「聞いていない」という回答が約 4 割、「覚えていない」という回答も 3 割を超えた。しかしながら、「説明会に参加した」、「行政から聞いた」、「近隣住民から聞いた」という回答も一定数存在する。とくに、「説明会に参加した」住民は、制作までの一連のプロセスに立ち会っており、当時は《ポチョムキン》制作チームや作品受け入れ側の住民とより

深い関わりがあった可能性が高い。また、実際に「作家に会った」、「作家とサポーターに会った」、「サポーターに会った」とする回答も約 4 割にのぼる。作家やサポーターといった運営側で活動する人々に会ったことで、より《ポチョムキン》に対する関心が向上し、鑑賞や維持管理活動に対するハードルが下がることも推測される。さらに、「制作や維持管理活動（掃除や草刈りなど）に関わったものはあるか」という、活動の当事者としての関わりを尋ねる問いに対しては、「関わったことはない」と回答した住民が最も多く 4 割を超え、次に「維持管理に関わった」住民が 3 割強という結果となり、この 2 つの回答が全体を二分する。現在《ポチョムキン》の維持管理を行う「倉俣有志の会」は 10 名の組織だが、以前集落で行っていた作品管理にはアンケート回答者だけでも 30 名以上と多くの住民に参加経験があることが明らかとなった。他にも、数としては多くはないが、「制作に関わった」、「受付をした」、「お茶をもてなした」といった、会期前や会期中の芸術祭が盛り上がる時期に活動に参加した住民も存在することが明らかとなった。

加えて、「《ポチョムキン》でのイベント参加」に関しては、最も多い回答が「参加していない」で約半数近く回答があり、「2003 年の完成パーティー」、「2006 年の映画上映会」と続く。完成パーティーは約 20 年近く前の出来事であるにも関わらず、回答者の 4 分の 1 もの人が参加したと答えている。このことから、《ポチョムキン》の完成は住民にとって印象的な出来事であり、当時の写真からはパーティーも盛大に行われていたことがうかがえる。また、「その他」の自由記述には、「神輿」、「太鼓」、「茶会」などの回答があった。住民へのヒアリングにおいては、「集落の神輿ではポチョムキンの前で Uターンさせていた」ということや、芸術祭関連で誘致した太鼓パフォーマンス「鬼太鼓座」などが話に上がっており、所々で《ポチョムキン》と住民との関わりが明らかになった。なお、2012 年にはニブロールによる《ポチョムキン》を会場にした住民参加型パフォーマンス「See [シーソー] Saw」が行われているが、アンケート配布時に情報を得ていなかったことにより、その項目を設けることができなかった。しかしながら、ニブロールのメイキング映像からは老若男女問わず多くの住民の参加があったことが見て取れる³⁰。

また、「《ポチョムキン》での活動やイベントがあれば参加したいと思うか」という今後の展開に関しては、「どちらでもない」が最も多く、次いで「予定が合えば参加したい」の回答が共に 3 割を超えている一方で、「とても参加したい」という回答は約 1 %でしかない。「あまり参加したくない」、「少しも参加したくない」といった回答も全体の 2 割を占めており、積極的とはいえない結果となった。ただし、「内容による」、「高齢で行けない」といった記述も見られることから、イベントの内容によっては参加意欲が変動することや、本調査の回答者に高齢者が多く、民家から離れたところにある《ポチョムキン》でのイベントへはアクセスが難しいという状況も考えられる。

³⁰ +++see/saw+++ (nibroll.com)http://www.nibroll.com/works/see_saw.html（最終閲覧日：2022 年 1 月 10 日）

⑭《ポチヨムキン》制作にあたり、行政や近隣住民からの説明を聞いたことがあるか	回答数
説明会に参加した	8 (9.6%)
行政から聞いた	6 (7.2%)
近隣住民から聞いた	6 (7.2%)
聞いていない	32 (38.6%)
覚えていない	27 (32.5%)
無回答	4 (4.8%)
計	83 (100%)

⑮《ポチヨムキン》の制作者や芸術祭サポーター（こへび隊などのボランティア）に会ったことはあるか	回答数
作家とサポーターに会った	11 (13.3%)
作家に会った	2 (2.4%)
サポーターに会った	20 (24.1%)
会ったことはない	40 (48.2%)
覚えていない	8 (9.6%)
無回答	2 (2.4%)
計	83 (100%)

⑯制作や維持管理活動（掃除や草刈りなど）に関わったものはあるか	回答数（複数回答可）
制作に関わった	3 (3.6%)
維持管理に関わった	32 (38.6%)
お茶をもてなした	8 (9.6%)
受付をした	2 (2.4%)
関わったことはない	37 (44.6%)
覚えていない	6 (7.2%)
その他	1 (1.2%)
無回答	4 (4.8%)
計	93 (112%)

⑰《ポチヨムキン》でのイベントに参加したことはあるか	回答数（複数回答可）
2003年の完成パーティー	21 (25.3%)
2006年の映画上映会	13 (15.7%)
かくれんぼなどのゲーム	1 (1.2%)
参加していない	38 (45.8%)
覚えていない	8 (9.6%)
その他	6 (7.2%)
無回答	6 (7.2%)
計	93 (112%)

⑯その他内訳（ゴミ拾い）

⑰その他内訳（神輿、太鼓、祭り、茶会）

⑱《ポチヨムキン》での活動やイベントがあれば参加したいと思うか	回答数
とても参加したい	1 (1.2%)
予定が合えば参加したい	27 (32.5%)
どちらでもない	30 (36.1%)
あまり参加したくない	11 (13.3%)
少しも参加したくない	7 (8.4%)
無回答	5 (6.0%)
計	83 (100%)

⑱ほか、内容による、高齢で行けない

⑲《ポチヨムキン》について自由記述

《ポチヨムキン》に関する自由記述欄には18件の回答が寄せられた。肯定的、否定的に関わらず、記述を「作品理解」、「作品での体験」、「場所や地域」、「維持管理や活動」、「関わりの度合い」の5つの項目に分類した。「作品理解」の項目には、《ポチヨムキン》に対して「よく分からない」といった記述が目立つ一方、「作品での体験」に基づく記述では、具体的な体験の内容や、否定的な印象も根拠と共に述べられており、より言語化ができていように思われる。「場所や地域」の項目では、《ポチヨムキン》のある場所や倉俣集落に言及があるものが対象となっており、5項目の中では最も賛否が分かれる結果となった。とりわけ、「家の近くに会っていい！ほぼ目の前。川があっている。」という記述と「近くにあるせいか通り過ぎてしまうだけで足を止めることがない」という記述は、どちらも「家の近くに作品がある」旨の記述ではあるが、そのおかげで鑑賞の機会に恵まれることと、近すぎること

でかえって通り過ぎるばかりであることの正反対の内容が見られた。他にも、「地域に芸術作品があるということは良いことだと思います。」という記述と、「倉俣の住民には不向きかなと思う」の記述は正反対の内容となっており、特に後者は、集落内での作品維持管理が中止となったことに通じるものがある。そして、「維持管理や活動」の項目では、現状の改善を望む声が目立つ。集落で集まる活動や維持管理活動の体制が住民から見ても改善が必要であるということが明らかとなったうえ、活動への参加は単に作品を鑑賞するという所から一段階踏み込んだ関わり方であり、現代アート作品が住民の生活に与える影響が大きい大地の芸術祭だからこそその記述であることが分かる。また、「関わりの度合い」の項目では、《ポチョムキン》を鑑賞する機会が無かったことが記述されている。先にも述べたように《ポチョムキン》は倉俣集落のほとんどの世帯がある住宅エリアとは離れた場所にあるほか、市街地とも反対方向にある。道路を挟んで向かいにある倉俣小学校も閉校となっており、ますます住民の足は遠ざかっていることが改めて明らかとなった。

作品理解	・ポチョムキンの名前の意味が良く分からない。あまり通ることがない。 ・私はポチョムキンは大地の芸術祭ではじめて出来たものだと思っていたのでよく分かりません。あの場所はポチョムキンができる前は柳林と言われていたように思います。 ・どこが芸術なのか、根本的に理解できない。かえってケヤキの木がかわいそうに見える。
作品での体験	・作品の中に足を踏み入れた途端、全く別の景色に足を踏み入れた感覚におそわれる。2005年に倉俣に引っ越してきたので、2006年以降のこへび隊には会ったことがある。 ・外国人と一緒に料理を作ったこと。言葉は分からなくてもとても楽しかったことです。こちらの料理もおいしそうに食べていました。 ・重苦しい風景であまり好きではない、人がいても見えないので怖いです
場所や地域	・私はポチョムキンができる前の「柳林」と呼ばれていた頃の場所が好きでした。大地の芸術祭でさびた鉄板で覆われたとき、自分の好きな場所がなくなってしまったようで残念な気持ちでした。今は慣れてしまいましたが以前のままだ良かったと思います。 ・家の近くに会っていい！ほぼ目の前。川があっている。 ・近くにあるせいか通り過ぎてしまうだけで足を止めることがない ・地域に芸術作品があるということは良いことだと思います。十日町の端から端まで散在していて、それを見て回る人が倉俣にも来てくれるのは芸術作品が地域に溶け込むのに良いあり方だと思います ・倉俣の住民には不向きかなと思う。
維持管理や活動	・年に1回くらいは何か活動してほしい。

	・維持管理が大変 ・田んぼの中に木が落ちて大変困っています。枯れ枝を片付けるのに一苦労しています。 ・環境維持管理活動を強化すべき
関わりの度合い	・倉俣に住んで 42 年、ずっと勤めていてイベント的なものにあんまり参加していません。 ・11 年前にこの土地に来て、会社と家の往復だけだったため、ポチョムキンのことには知らないです。 ・小学生の時にいったきりで、あれから行っていません。

(表 4) 《ポチョムキン》について自由記述

倉俣集落との関わり (20～28)

続いて、住民と倉俣集落との関わりに注目していく。まず、「《ポチョムキン》周辺の釜川や田んぼなどの景色を気に入っているか」という問いに対しては、「とても気に入っている」および「まあまあ気に入っている」という回答で全体の 7 割以上を占める結果となった。次いで「どちらでもない」の回答が約 2 割、「あまり気に入っていない」、「全く気に入っていない」という否定的な回答はほとんど見られなかった。このことから、回答者のほとんどが《ポチョムキン》周辺の自然を好んでおり、《ポチョムキン》に対して「とても気に入っている」、「まあまあ気に入っている」の回答が約 3 割であったことを踏まえると、圧倒的な差が明らかとなっている。

「地域の環境整備に参加したことがあるか」という問いに対しては、「参加したことがある」の回答が 6 割を超え、「参加したことない」の回答数を 2 倍以上上回った。回答者の男女比がおよそ半数ずつであったことを鑑みると、地域の環境整備は男性のみの活動にとどまらないことが分かる。また、《ポチョムキン》の維持管理には 32 名もの回答があったが、環境整備についてはそれを 20 名も上回る回答数であることも明らかとなった。この理由として、環境整備と作品維持管理が同日に行われるために分担を決めていたことや、《ポチョムキン》完成時には高齢のために集落の環境整備から引退していたこと等が考えられる。

続いて、「倉俣での行事は好きか」という問いに対しては「まあまあ好き」の回答が最も多く半数を超えている。しかし、「とても好き」という回答は全体の約 10%で、「まあまあ好き」の回答とは数値に大きな差が開いている。また、「どちらでもない」とする回答は約 20%、否定的な「あまり好きではない」、「全く好きではない」の回答は 2 つを合わせても 10%にも満たない。集落での行事は、大人たちにとっては役割も多く参加しなければならないものという風潮があるように思われるが、慣れ親しんだ土地での行事に関しては肯定的な回答が多く見られる結果となった。

さらに、「倉俣地域に対する愛着はあるか」という問いには、「まあまあ愛着がある」の回答が最も多く 4 割を超え、次に「とても愛着がある」という回答で 3 割を超える。「どちら

でもない」、「あまり愛着はない」、「全く愛着はない」の項目を見てみても、この結果は「《ポチョムキン》周辺の釜川や田んぼなどの景色を気に入っているか」という問いの結果とほぼ同様であり、住民のほとんどが集落を好ましく感じていることが分かる。

⑳《ポチョムキン》周辺の釜川や田んぼなどの景色を気に入っているか	回答数
とても気に入っている	24 (28.9%)
まあまあ気に入っている	36 (43.4%)
どちらでもない	17 (20.5%)
あまり気に入っていない	2 (2.4%)
全く気に入っていない	1 (1.2%)
無回答	3 (3.6%)
計	83 (100%)

㉑ 地域の環境整備に参加したことがあるか	回答数
参加したことがある	52 (62.7%)
参加したことがない	25 (30.1%)
無回答	6 (7.2%)
計	83 (100%)

㉒ 倉俣での行事は好きか	回答数
とても好き	9 (10.8%)
まあまあ好き	44 (53.0%)
どちらでもない	22 (26.5%)
あまり好きではない	4 (4.8%)
全く好きではない	1 (1.2%)
無回答	3 (3.6%)
計	83 (100%)

㉓ 倉俣地域に対する愛着はあるか	回答数
とても愛着がある	26 (31.3%)
まあまあ愛着がある	36 (43.4%)
どちらでもない	16 (19.3%)
あまり愛着はない	1 (1.2%)
全く愛着はない	1 (1.2%)
無回答	3 (3.6%)
計	83 (100%)

倉俣小学校との関わり

最後に倉俣小学校との関わりに焦点を当てていく。「ご自身またはご家族は倉俣小学校の卒業生であるか」という問い（複数回答可）には、「自身も家族も卒業生ではない」の回答と無回答を合わせても 10%にも満たないことから、回答者の 9 割以上が自身もしくは家族が卒業生であることが明らかとなった。加えて、「倉俣小学校に愛着はあるか」という問いに関しては、「とても愛着がある」という回答が最も多く約 4 割、「まあまあ愛着がある」という回答が 3 割以上を占める。このことから、回答者の多くは、自身や家族の卒業した小学校に何かしらの思い出があることが分かる。そのことを裏付ける内容は、「倉俣小学校で印象に残っていることはあるか」という問いに対する回答から見て取れる。「(印象に残っていることが) ある」と答えた人は 4 割を超え、32 件もの自由記述が寄せられた。中には「学校の先生、子ども達、保護者の仲が良い」といった日常生活のことから、運動会や学芸会などの学校行事のほか、「大地の芸術祭へ学校で参加していたこと」、「子ども達が芸術祭を手伝っていた」という芸術祭関連の記述も見られた。小学生と芸術祭の関わりは、先に述べたニブロール作品や、倉俣集落以外の作品制作のことと推測される。

そして、《ポチョムキン》同様、「倉俣小学校での活動やイベントがあれば参加したいと思うか」という今後に関する問いに対しては、「予定が合えば参加したい」の回答が最も多く約 4 割、「どちらでもない」の回答が 3 割以上を占める結果となった。倉俣小学校でのイベントと《ポチョムキン》でのイベントの問いを比べると、前者の方が全体的に肯定的な回答

結果であることが分かる。微々たる差ではあるが、「とても参加したい」、「予定が合えば参加したい」の回答数が増え、「どちらでもない」、「あまり参加したくない」、「少しも参加したくない」の回答数が少なくなっている。このことは、倉俣集落の住民が《ポチョムキン》よりも地域そのものに魅力を感じており、イベントに参加するという自発的な行動への意欲も向上したと考えられる。

②④ご自身またはご家族は倉俣小学校の卒業生であるか	回答数（複数回答可）
自身が卒業生	41（49.4%）
家族が卒業生	54（65.1%）
自身も家族も卒業生ではない	5（6.0%）
無回答	1（1.2%）
計	101（122%）

②⑥倉俣小学校で印象に残っていることはあるか	回答数
ある	35（42.2%）
ない	19（22.9%）
無回答	29（34.9%）
計	83（100%）

②⑤倉俣小学校に愛着はあるか	回答数
とても愛着がある	33（39.8%）
まあまあ愛着がある	28（33.7%）
どちらでもない	9（10.8%）
あまり愛着はない	4（4.8%）
全く愛着はない	6（7.2%）
無回答	3（3.6%）
計	83（100%）

②⑦倉俣小学校での活動やイベントがあれば参加したいと思うか	回答数
とても参加したい	4（4.8%）
予定が合えば参加したい	34（41.0%）
どちらでもない	28（33.7%）
あまり参加したくない	10（12.0%）
少しも参加したくない	2（2.4%）
無回答	3（3.6%）
計	83（100%）

②⑦ほか、内容による、高齢で行けない

②⑧倉俣集落や小学校について自由記述

倉俣集落や小学校に関する自由記述欄には15件の回答が寄せられた。記述の内容は「地域について」、「小学校の思い出」、「閉校後の小学校について」の3つの項目に分けることができる。まず、「地域について」の項目では、自然や人柄の豊かさや、生活の不便さ、そして少子高齢化の課題を挙げるものに記述が分かれる。自然や人柄の豊かさと生活の不便さの共存は、地方の特色としてよく述べられることであり、典型的な里山地域に位置する倉俣集落も例外ではない。特に、愛着のある小学校の閉校は地域に重大なショックを与えていることがうかがえる。「小学校の思い出」の項目では、先の「倉俣小学校で印象に残っていることはあるか」という問いに追加する形での記述と、回答者家族と倉俣小学校との関わりを記述するものがある。「閉校後の小学校について」の項目では、小学校の活用や地域の拠点にすることを中心に、小学生の姿を懐かしむものや倉俣小学校に通わなかった住民からの記述もある。この項目への記述からは、閉校後も小学校が地域で大切にされていることがうかがえる。

地域について	・釜川の景色は洪水以降、工事が続いている。この近辺の景色はとても好きで、車で走っていても、いつ見てもいいなと思います。しかし高齢になるにつれて車なしでの生活が難しいので、豪雪で終の棲家にはできないと思う。
--------	--

	・人の優しいところです ・転勤があり、妻の実家に引っ越してきました。子供たちをこの自然豊かな地区で育てられるということをととても嬉しく思っています。少子高齢化は止められませんが、子どもたちの思い出に残る地域の行事が行われることを願っています。 ・小学校に子供がいたころは親たちとの交流があったが、今はなかなか村内でのお付き合いがなくなった。 ・子どもが減ってしまい統合もやむを得ず。倉俣地区のような山の中は不便で老人には住みにくい。 ・昔に比べると行事が少なくなりました。時代の流れとは言え、学校に限らず少しずつ近代化して、便利に見えるようで何か心が淋しいような。
小学校の思い出	・中学校体育館の雪掘りや中学生（寄宿の生徒）の弁当運びや、冬の校舎までの道ふみなどをした。 ・家の目の前に学校がある。お兄ちゃんが最後の卒業生で、私が最後の入学生でした。 ・むかし唄のおばさん、あんざいあいこさんが来たことです。ピアノ開きの時です。服はたしかふわっとしたドレスだったと思います。 ・私は昔の倉俣小学校の出です。家族は今の小学校の出身です。嫁も近くから来ているので全員倉俣小学校の出身です。
閉校後の小学校について	・統合後の小学生 ・倉俣小が地域の活性化につながるような再利用ができればいいと思う。 ・子どもの数も少なく、遊んでいる姿もあまり見ない。上のグラウンドに登ってみると昔、子どもの頃の運動会等が眼に見えるようだ！ ・小学校を有効活用してほしい ・地域を見守ることの拠点としてこれからも大切にしたい

（表 5）倉俣集落や小学校について自由記述

3.4 アンケート調査で得た結果をもとにしたヒアリング

アンケート調査後、ヒアリング協力者 10 名と倉俣集落外出身の倉俣小学校卒業生 2 人に対してアンケート結果をもとに《ポチョムキン》や倉俣集落との関わりに関する聞き取り調査を実施した。アンケートで得た情報をさらに詳しく聞いていくと、断片的だった情報が繋がったり、被験者のバックグラウンドも考慮しながら話を進めることができたりと、アンケート結果だけでは不十分だった情報量を補填することができた。新型コロナウイルス流行下でありながら対面での調査にご協力いただいた方々には感謝したい。

被験者の属性は以下の通りである（表 6）。なお、個人情報保護のため被験者の名前はアルファベットで表記することとする。ヒアリング調査と同時期には倉俣有志の会会員とは活動に際して話を交わしており、現場の温度感も知りながら聞き取り調査を実施することができたことは幸いだった。

	性別	年齢	職業	倉俣居住年数	備考
A	男性	70 代	無職	51 年以上	
B	男性	60 代	会社員	51 年以上	

C	女性	80代	無職	51年以上	
D	男性	40代	病院職員	5年未満	2021年春に移住
E	女性	10代	学生	11～20年	田沢小学校生
F	女性	10代	学生	11～20年	中里中学校生、Gとは家族関係のため同時実施
G	女性	70代	農業	41～50年	Fとは家族関係のため同時実施
H	男性	30代	会社員	31～40年	
I	男性	50代	会社員	51年以上	倉俣地区振興会会長
J	男性	60代	農業	51年以上	「倉俣有志の会」会長
K	女性	20代	学生	重地集落出身	Lと同時実施
L	女性	20代	学生	下山集落出身	Kと同時実施

（表 6）倉俣集落におけるヒアリング属性

ヒアリングの内容は、被験者のアンケート結果によりそれぞれ異なるが、以下の4つの項目を設けて聞き取りを行った。

- ・ポチョムキンのある場所について
- ・ポチョムキンの印象について
- ・ポチョムキンの制作や管理、芸術祭でのことについて
- ・倉俣集落について

まず、ポチョムキンのある場所について、事前調査やアンケート結果ではポチョムキン制作以前は柳林と呼ばれていたことが明らかとなり、ごみが捨てられていたことに対する認知度は低かったことが分かっている。ヒアリングでは、柳林の存在に関しては広く認知されているが、林を構成するものは柳だけではなく雑木林に近かったとされる。草木が生い茂っていたために中に入ることは無かったという被験者がほとんどではあるが、被験者 A は中で遊んだこともあると述べている。《ポチョムキン》脇の釜川の堤防や橋は洪水により新しく造ったことが分かり、釜川は子供たちの遊び場や学校の授業ではよく利用されていた。周囲の景色については肯定的な回答が多く、住民は豊かな自然や小学校の校舎に心惹かれるものがあるようだ。

つぎに、ポチョムキンの印象については、アンケート結果同様に肯定的な印象を持つ被験者だけではないことが明らかとなった。肯定的な意見としては、静かでリラックスできることや広い空間で遊び場にもなるということ等が挙げられ、否定的な意見としては、作品の意図が分からないことや管理が大変であること、以前の林を気に入っていた等が挙げられた。倉俣集落以外の集落出身の被験者 K と L は倉俣小学校の卒業生だが、幼稚園児の時に散歩で《ポチョムキン》へ訪れたことの記憶がより強く残っているという。なお、ヒアリングのほとんどは《ポチョムキン》の作品空間で実施しており、被験者と共に鑑賞すると「こんなに素敵な所だったのか」「たまにここへ来るのもいいかもしれない」と改めて《ポチョムキン》を見つめ直す被験者も見受けられた。

そして、ポチョムキンの制作や管理、芸術祭でのことについては、制作時の状況から現在の活動状況まで、被験者の経験から多くの声を得ることができた。集落と《ポチョムキン》との関係において、《ポチョムキン》制作時に集落を代表して制作を進めた第一人者として M の存在は欠かせない。M は《ポチョムキン》制作時に集落内の指揮を執り、個人的にも清掃を行うなど精力的に作品管理に携わってきた住民で、ヒアリングにおいても度々名前が挙げられた。集落の住民も M の熱意に後押しされて活動に関わることがあったが、現在 M は高齢のため集落を離れている。その後、M のような先導役が不在となったことで《ポチョムキン》に関わる活動に不満が出てくることとなった。「倉俣有志の会」会長を務める J は、住民が作品の管理を任されることについて「M さんは当時、みんなを引っ張っていく存在だった。有志の会には作品が好きで活動する者はほとんどいないが、集落の土地に作品があるのだから、それを集落が放っておくことはできない。」と述べている。ヒアリングを行った被験者の中に積極的に《ポチョムキン》の維持管理活動に携わる者は目立っては存在せず、鑑賞についても住居が《ポチョムキン》から離れている場所にある被験者は頻繁に訪れることがないということが明らかとなった。しかしながら、被験者 E、F は余暇に《ポチョムキン》へ頻繁に訪れ、時には友人も誘っているという。特に被験者 E は、小学校の地域学習の時間に《ポチョムキン》の鑑賞を提案しクラス全員で訪れており、大勢に対しても鑑賞の機会を自ら創出していた。また、被験者 D の子供は近所の遊び場としてよく《ポチョムキン》を利用するなど、日中に自由時間の多い子供たちは進んで《ポチョムキン》と触れあう機会があることが分かった。《ポチョムキン》以外の芸術祭作品も訪れたことがあるという被験者やその家族も多く見受けられ、他の芸術祭作品の鑑賞機会や認知度も一定数あるように思われた。被験者 B は地元新聞記者だったことからトリエンナーレ時の各地の盛り上がり様子にも立ち会っており、その経験から芸術祭を推進したいと述べている。

さらに、倉俣集落について聞いたところでは、ヒアリング被験者の多くが過疎高齢化の実態を感じているようであった。とりわけ倉俣小学校の閉校は印象が強く、「子供の姿を見ることがなくなってしまった」、「地域内での交流が少なくなった」といったことが述べられていた。幼い子供を育てる被験者 D は、「自然豊かな地で子育てができることは良いが、子供がバスで小学校に通わなければならない、近所に友人もいないことは子供にとっては辛いことかもしれない」と述べているほか、倉俣小学校在学時に閉校を経験した被験者 F は、倉俣小学校は複式学級だったこともあり全校生徒の仲が良かったと振り返っていた。2020 年からの新型コロナウイルス流行の影響で祭りの中止や縮小があったことも述べられており、そのことが集落内の交流減少に拍車をかけているようにも思われる。

3.5 《ポチョムキン》と倉俣集落における調査の考察

《ポチョムキン》は 2003 年に制作・公開され、季節プログラムパスポートの表紙を飾

ったり、トリエンナーレ毎のガイドブックには新作に混ざって作品詳細が必ず掲載されたりと、大地の芸術祭を代表する作品である。道路沿いに展示された屋外作品のため積雪時以外は常に鑑賞でき、休日には鑑賞者が訪れる。しかしながら、《ポチョムキン》における活動の変遷を見るに、その実態は第1章で述べた「協働」とは程遠いように感じられる。

本章では、①作品の性質の分析、②《ポチョムキン》における維持管理活動、③倉俣集落住民に対する《ポチョムキン》および地域への意識、④3の調査で得た結果をもとにしたヒアリングの4つを調査してきた。これらの調査によって、集落内で維持管理活動に携わる者がおり芸術祭運営スタッフとも定期的に連絡を取っていることや、集落内でも《ポチョムキン》に対して愛着を持っている住民が一定数いること、トリエンナーレ時のおもてなしやパフォーマンスのほかサポーター活動などが実施されていたことが明らかとなった。今後《ポチョムキン》における活動が「協働」へと発展していく可能性は高く、そうとすれば現在の活動状況も「協働」の黎明期として捉えることもできよう。

ただし、現時点では住民からの《ポチョムキン》に対する興味や関心はまだ不十分であり、そのことが集落での維持管理活動にマイナスな印象を与える要因の1つであるように思われる。倉俣集落と《ポチョムキン》の関係性が「協働」へと発展し、住民が《ポチョムキン》を地域の象徴として好ましく感じられるようにするためには、より多くの住民の主体的な活動への参加や《ポチョムキン》に対する愛着が必要である。ともすれば、来たる2022年の芸術祭が「協働」が発展するきっかけになる可能性もある。住民がやりがいや主体的な関わりしろを持ち続けることができるよう、運営側も「協働」への道筋を示しすぎないことを配慮しつつ、より魅力的な作品の伝え方や活動への関わり方について、都度検討を重ねていくことが求められる。

第4章 芸術祭と地域の持続可能性

ここまでは主に現在までの出来事をまとめ、その流れの中にある集落での「協働」に関して調査を進めてきた。本章では、2021年現在の「協働」の在り方に焦点を当て、現在における「協働」の定義と、多くの人が関わり続けてきた「協働」が現在の越後妻有にもたらす効果について考察を進めていく。

4.1 「協働」による芸術祭と地域の相互作用

トリエンナーレ開催後に作成される総括報告書によると、「大地の芸術祭は、従来から、『交流人口の増加』『地域の情報発信』『地域の活性化』の3つを主要な目的として開催してきた³¹⁾」と記されており、大地の芸術祭が地域振興を目的として行われていることは明らかである。確かに、大地の芸術祭の総括報告書ではその3つの主要な目的に対して独自の評価方法を確立し、それにより芸術祭が地域振興に寄与している結果が得られている。しかしながら、いくら地域活性化や地域振興といったキーワードに対する社会的関心の高まりや、行政からの多額の助成があるとはいえ、「芸術祭が地域を活性化（芸術祭→地域）」という一方向的な記述では作品の質の軽視ややりがい搾取といった批判が出やすくなる上、成熟期を迎えた大地の芸術祭を記述する項目としては不十分だと思われる。このように考える背景には、2018年に開催された第7回展終了後、北川が記録集の中で述べている一説がある。北川は、「幸い、棚田や耕作放棄地、鎮守の杜、集落、空家、廃校、川や里山の魅力をアーティストが『発見』し、それら生活が、あるいは生活の痕跡がある私有地を様々な疑問・反対、交流を通しアートサイトとし、その制作過程で協働し、それに多くの来訪者が驚き、感激するなかで地域が喜びや誇りを持つようになった。こうして越後妻有の『大地の芸術祭』はそれこそ老若男女が喜ぶものになっていったことで、芸術祭はさまざまな困難を乗り越えていくことができた³²⁾」と述べており、北川のこの言葉からは、里山の魅力や生活にフォーカスした大地の芸術祭で「協働」が行われたことで、まずは地域が元気になり、その次に芸術祭自体も喜ばれ、現在も芸術祭が継続できているという「協働」の段階が読み取れる。これは、「芸術祭が地域を活性化（芸術祭→地域）」という流れの後に「地域が芸術祭を活性化（地域→芸術祭）」という反対の働きを持つ流れが起きていることを意味している。そして、このように地域と芸術祭が相互に発展し、互いが互いを活性化し合うことで双方には持続可能性が生まれると考えられる。加えて、第1章でも示した《うぶすなの家》の「協働」は、実際に芸術祭と地域の

³¹⁾ 大地の芸術祭実行委員会「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018 総括報告書」(2019) p. 2

³²⁾ 北川フラム／大地の芸術祭実行委員会『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018』株式会社現代企画室(2019)、p. 13

双方に持続可能性をもたらしており、北川が述べた内容と重なっている。

以上のことから、大地の芸術祭における「協働」は、中には 20 年以上が経過している取り組みもあり、「協働」が発展していくと芸術祭と地域の双方に持続可能性をもたらすことが明らかになってきた。「協働」の段階は、第 2、3 章で取り上げた《ポチョムキン》のように、まずは作品が提案されて住民やスタッフや、作家で制作やメンテナンス、おもてなしが行われる初期の段階、次に、地域内外で作品に対して愛着を持つ人が増える段階、作品のある地域への愛着が増えたり、活動が盛んになったりして地域が元気になっていく段階、そして、《うぶすなの家》のように元気になった地域が芸術祭を盛り上げる段階、という順序を踏む。そして、継続的に大地の芸術祭に関わっている人物であればこの一連の流れを実感しており、「協働」についてもそれぞれの価値観を持っているのではないだろうか。次項では大地の芸術祭の運営に携わる主体にヒアリングを行い、現在の「協働」の状況を複数の視点から見ていくこととする。

4.2 「協働」の主体に対するヒアリング調査

昨今におけるこのような流れの中で、実際に「協働」の枠組みの中で継続的に活動する 6 名に対し、現地でヒアリング調査を行った。第 3 章においても倉俣集落の住民に対してヒアリング調査を行っているが、その内容は《ポチョムキン》や倉俣集落という特定の対象に関するものでしかないことに加え、倉俣集落において「協働」の取り組みはまだ始まったばかりであるため、大地の芸術祭における全体的な「協働」を考察する材料としては十分ではない。本章では、芸術祭を代表する複数の「協働」の取り組みに対して、そこに継続的に携わっている人々がどのように「協働」やその効果を認識しているかを明らかにし、「協働」が芸術祭と地域の相互に作用するために必要な要素を導き出していく。これにより、第 1 章において示した「協働」の仮定を再度考察し、本研究の目的の 1 つである芸術祭と地域の双方において発展的な「協働」のあり方を明らかにしていくことができる。

今回のヒアリング調査では、多様な「協働」の主体のうち、被験者として次の 6 名からの協力を得ることができた。

- ・ 原 蜜／NPO 法人越後妻有里山協働機構事務局長 兼 株式会社アートフロントギャラリー
- ・ 横尾悠太／NPO 法人越後妻有里山協働機構
- ・ 鞍掛純一／作家、日本大学芸術学部美術学科教授
- ・ 高橋剛／十日町市観光交流課芸術祭企画係係長
- ・ 水落静子／うぶすなの家、十日町市議
- ・ 渋谷雅裕／サポーター、清津案内人

以上の被験者には①あなたにとって「協働」とは何か、②越後妻有の活動で大切にしていること、③活動の中で地域や芸術祭の持続可能性を感じたこと、という3つの質問をもとに話をしていただいた。

まず、NPO 法人越後妻有里山協働機構事務局長 兼 株式会社アートフロントギャラリー職員として大地の芸術祭に携わる原蜜は、北川の誘いで1999年より越後妻有に関わりを持ってきた人物である。北川の元で1番近い距離で長い期間共に越後妻有での運営に関わり、現在はアートフロントギャラリーに所属しながらもNPO 法人越後妻有里山協働機構の事務局長を兼任し、大地の芸術祭の現場を取りまとめている。ヒアリングにおいて、①「協働」とは何か、という問いに対して原は「これが『協働』なのだ、というように考えたことはない」としつつも、『協働』は直接的な効果が表れたり、方程式的に考えられたりするものではなく、やっていくうちに時間がたって、こういうことがやりたかったのか、ということがじわじわと分かってくること」や、「作品制作に限らず、芸術祭に関わる人たちが1つのチームとして、できるだけ広い間口を持ちながら行うこと」ではないかと述べている。なお、「協働」の取り組みについて「地域活性化」という分かりやすい言い方をしているが、「協働」が美談的に完結するものとして語られていくことで、芸術祭が消費されてしまうとの懸念も示している。次に、②越後妻有の活動で大切にしていることとして、原は、「芸術祭が消費されないことを意識してやっていくことが前提としてあって、違うことを考えている人が同じテーブルにつく」ことが取り組みとして意味のあるものになっていくと述べており、要するに地域活性化の枠組みにとらわれずに多様な人が同じ場に関わる機会があることを重要であるとしている。また、NPO 法人越後妻有里山協働機構の取り組みは原にとって理想に近いものであるとし、彼らの取り組みによって地域の人々が越後妻有の可能性を学んでいける環境もまた大切であると考えている。③地域や芸術祭の持続可能性に関する問いに対して、原は、里山協働機構の取り組みの結果として現れてくるものであり、我々にかかっていると述べる。ただし、中途半端な取り組みでは不十分であるほか、大地の芸術祭開催から20年以上たった今でも、経済的に自立するにはまだ足りていない状況があるという。

次に、NPO 法人越後妻有里山協働機構職員の横尾悠太は作品のメンテナンス及び施設管理、サポーター調整などを受け持っており、2015年より勤務している。第2、3章では《ポチョムキン》という大地の芸術祭作品を事例に調査を進めてきたが、横尾は《ポチョムキン》において維持管理や集落との連絡を担当していることから、《ポチョムキン》における「協働」についても話を聞くことができた。①「協働」とは何か、という問いに対しては、「作品を中心に緩やかな関係性が生まれること」というように答えている。横尾によると、「協働」は作家や住民、サポーター、スタッフ等の多様な人の関わりの中で生まれてくるものであり、目的を追求するうちに自然と繋がりができる。横尾にとっては、

それが「協働」であるという。②越後妻有の活動で大切にしていることについては、担当の業務によって異なると述べる。作品のメンテナンスでは、作品が美しい状態にあるのが第一で、管理を受け持つ住民には成果の上がる活動にしてもらえよう心掛けていているという。そして、横尾が管理する作品兼宿泊施設の「脱皮する家」、「夢の家」、「三省ハウス」では、「やはり1番は、お客さんが来て集落の人に喜んでもらいたいという気持ちでやっています」と話す。さらに、サポーターに関わる業務では、「気持ちを扱う仕事なので、人のケアを第一に考えて、充実した活動となることが大切」であるという。③活動の中で地域や芸術祭の持続可能性を感じたことはあるか、ということに関しては、「協働」が住民の内面的な部分に働きかけており、地元住民の集落や作品に対する肯定感が高まっていることを感じているという。そして、横尾はそのことが持続可能性にも繋がると考えている。「作品を気にかけて管理してくれるのは喜ばしいことであり、持続可能性を考えた時に、NPO 法人越後妻有里山協働機構は縁の下の力持ちのような役割である」と述べる。《ポチョムキン》と倉俣集落において横尾は、謝礼があるとはいえ、住民自らが手を挙げて管理をしてくれることは地域住民が作品を大事にしようとしていることの表れであるとする一方で、住民の作品に対する愛着がまだ薄いということも挙げている。作品が地域の方々の象徴になることを目指して活動していくとしている。

鞍掛純一は、大地の芸術祭出品作家であるが日本大学芸術学部美術学科教授として教鞭も執り、その職業を活かして学生とともに作品制作を続けてきた。越後妻有との関わりは2004年に始まり、2年半もの期間をかけて制作した《脱皮する家》(2006)をはじめとする、「鞍掛純一+日本大学芸術学部彫刻コース有志」として「彫る」ことに注力した作品のほか、2018年には個人作家「鞍掛純一」として、自身が得意とする金属を用いた作品《はなしるべ》(2018)を発表している。①「協働」とは何かという問いについて、関わっている誰もが同じ能力を持っているわけではなく、優劣もないことを前提としつつ、「その場所、その人、その土地を好きになり、互いに補い合い、持っているものをお裾分けのできるための素地をつくること」であり、それは「生きる営みの根本的な所にあるもの」とであると述べている。鞍掛は、現代の人間の営みや時間軸の捉え方が少し前の時代に戻されると良いと考えており、過疎高齢化の進む越後妻有ではその実践が可能になっているという。鞍掛や学生たちが普段生活している東京の設備との対比も踏まえながら、越後妻有では人に加えて自然を相手にすることや、その土地のルールを守る必要があり、その際に「協働」は生まれやすいとしている。次に、②越後妻有の活動で大切にしていることは、鞍掛は「自分ができることは全部やること」としており、作品の管理も里山協働機構に頼るばかりではなく、定期的に現地を訪れていないと教授としても下の世代に伝えていくことができないと考えている。大地の芸術祭とは15年以上にもわたる関係性を持つ鞍掛は、今や集落の多くの人々とは顔見知りで、鞍掛を頼りにしている住民も多いという。《脱皮する家》の制作時は住民から嫌がらせやデマを流されたこともあったというが、鞍

掛は「自分たちがいい作品を作るとか、ちゃんとルールを守るとかの前に、ここは人の土地であるということに気付かされた」と述べており、集落の人には育ててもらったという思いを持っている。そして、「自分を頼りにしてくれることに関しては、本気で応えていく」ということを40代後半になってから考えるようになったという。鞍掛のこの考えは、③活動の中で地域や芸術祭の持続可能性を感じたことはあるか、という問いに対しても共通する部分がある。鞍掛自身が越後妻有に作品を残し、地域に来続けて、そして人を連れてくるという行為が、地域や芸術祭の持続可能性に繋がっているのではないかと述べており、結果的にその行為によって、地域に対する尊敬や作品に出会う喜びを誘発するという。2021年、鞍掛と有志の学生は、松代城にて《脱皮する時》という作品を発表している。コロナ禍であったために、学生はPCR検査や日帰りといった対応が求められる中での現地制作であったが、直接的・間接的に作品に携わった人々が作品の完成や来訪者の反応で喜んでいるのを鞍掛は傍で感じ取っており、美術館と違い、作品の評価がダイレクトに伝わってくるからこそ、鞍掛はそこにやりがいを感じるとともに、より多くのことを越後妻有では実践していくとし、鞍掛の周辺に限らず様々な場所で継続的に人が関わっていくシステムを構築する必要があると述べている。

高橋剛は、大地の芸術祭の実行委員会組織を構成する十日町市観光交流課芸術祭企画係において係長を務めている。高橋は十日町市内出身であり、合併前の2003年より職員として働いており（当時は中里村役場での勤務）、現在に至るまでのほとんどが地域振興に関わる部署への配属だという。したがって地域住民との交流の機会も多く、休日に集落を尋ねて話を聞きに行くなど、地域に対する思い入れも強い人物だ。①「協働」とは何か、という問いに対し高橋は「1つの目的に向かって一人一人ができることを補完しながらやっていくこと」と述べている。続けて、大地の芸術祭の作品の中で、必ずしも制作段階で「協働」が成立する必要はないとし、完成後の作品に多くの人に関わり結果的に「協働」が行われるパターンがあっても良いのだという。ただし、大地の芸術祭の活動において、初めの段階から「協働」が担保されるとは限らず、活動の中で誰かがアイデンティティを失い、別の主体に引っ張られる形になってしまうものに関しては「協働」とは言い難いのではないかと述べている。次に、②越後妻有の活動で大切にしていることは、当たり前の暮らしを守っていくこと、であるという。越後妻有には、自然や食の豊かさや、一人では生きていけない冬の生活など、未だ価値や誇りとして住民に認識されていない暮らしの宝が多いとし、里山の文化や人のつながりを大切にしている芸術祭の取り組みを通してそのことに気付いてもらえれば良いと述べている。また、十日町市は集落に作品ができることがゴールではなく、「集落が作品に対して主体的に汗をかく機会がどれだけあるか」という観点で集落へのヒアリングを行うことが多いほか、高橋が今まで地域に入ってきた経験から、《ポチョムキン》における島田東一のように一人で孤軍奮闘するような住民がいないようにすることも大切であるという。③活動の中で地域や芸術祭の持続可

能性を感じたことはあるか、ということに関しては、「芸術祭を通して、住民の価値観が変わってきていることを実感している」という。高橋によると、芸術祭や地域活性化といった最近の動向に対して閉塞的な考えを持っていた住民が、地域に対して前向きに捉え直している動きが見られるとのことである。一方で、住民の高齢化により管理が行き届かなくなる可能性が高い作品もあり、そのような作品は撤去や隣集落との「協働」も視野に入れていくという。また、少子高齢化によって集落の祭りが行われなくなったり、当番制で行われたりする中で、集落の子ども達が祭に対して消極的な印象を持つことも高橋は懸念しており、「大地の芸術祭が、地域の喜びや祭りを伝えていくきっかけになる可能性も秘めているのではないかな」との見解も示している。高橋は自らが持つ考えと観光交流課としての考えの間にギャップは無く、十日町市職員であるということも、自分の伝えたいことを伝えていくことや、挑戦する手段の1つであると考えている。

水落静子は、第1章でも取り上げた芸術祭作品《うぶすなの家》(2006)に立ち上げから携わり、現在は食事や宿泊対応をするお母さんたちのリーダー役を務める。《うぶすなの家》はNPO法人越後妻有里山協働機構が管理・運営を受け持つが、開館時には地域のお母さんたちがパートタイマーとして働き、水落は里山協働機構と現場のお母さんたちとの仲介役を担う。また、水落は十日町市内出身で2017年からは市議会議員として十日町市下条地区の振興にも携わっており、明るい振る舞いで地域住民からの信頼も厚い人物である。ヒアリングにおいて、①「協働」とは何かという問いに対して水落は、『協働』という言葉はNPOが設立されるときに初めてその意味を実感し、「みんなで協力し合って芸術祭をやっていくということなんだ」と述べている。②越後妻有の活動で大切にしていることについては、「(うぶすなの家は)一人ではできないから、やれる人で頑張ろうという感じでやっている」、「NPOがいて、住民がいて、その真ん中にある役目が私かなあと思っていて、営業日の親方もみんなで回しながら運営するのが良いと思っている」と述べており、うぶすなを家の運営には皆が主体的に関わるのが大切だと考えている。③地域や芸術祭の持続可能性を感じたことはあるか、という話題については、「今のうぶすなは高齢のスタッフも多くて毎日営業するとくたびれる時もあるけど、今までの関わりの中で一緒にやる人を見つけながら、うぶすなの家はずっと継続する施設であってほしい」とし、うぶすなの家は、最近になって現役のお母さんと集落の若い世代のお母さんたちとで料理教室を開催しているという。水落は「この活動を続けていって、できれば来年の会期には若いお母さんたちにも2、3回ほど来てほしいなと思ってるんだけど、押しつけじゃダメだから、それをお願いするのはもう少し一緒にやってからだなあ」と述べており、今後の継続的な展開についても考え始めている。

最後に、渋谷雅裕は大地の芸術祭サポーター経験があり、十日町市と隣接する魚沼市で小学校教諭として働く十日町市民である。渋谷はこへび隊の再編にあたりサポーターの再

登録をしていないが、再編前は地元サポーターとして主にツアーガイドを担当していた。渋谷は日頃から文化的な活動やボランティアに参加し、居住地の十日町市や勤務地の魚沼市では手話や観光地ガイド、2021年の東京オリンピックサポーターなど、特定の地域にとどまらない活躍をみせる。現時点においてこへび隊の登録を行っていないのも、勤務地である魚沼市でのボランティア活動に力を入れたいから、との理由からである。また、2018年に大地の芸術祭作品が入り一躍人気スポットとなった清津峡溪谷トンネルにおいては、作品展開以前から「清津案内人」として清津峡のアテンドを行っている。まず、①「協働」とは何か、ということに関して、渋谷はそれほど考えて行動してきたことは無いというが、「私の場合は『自分ができることをやっ払いこう』というところからスタートしていて、他の人と一緒になった時に『協働』になるのではないか」、と述べている。②越後妻有の活動で大切にしていることは、地域間の壁を超えていけるように働きかけることであるという。多方面に活動の場を持つ渋谷は、それぞれの活動が互いに役立つことがあり、芸術祭のサポーター活動に際して近隣の魅力も合わせて紹介することや、反対に越後妻有の外で大地の芸術祭について話すなどしているほか、勤務先の小学校の児童を大地の芸術祭へ何度も連れてきているという。それによって、「地道ではあるけれど、大地の芸術祭の取り組みや、自らの活動を知ってもらう機会になれば良い」、と述べている。③地域や芸術祭の持続可能性を感じたことはあるか、ということに関しては、渋谷は若干の疑念を示している。清津峡が起点となって芸術祭の知名度が高まっていく一方で、本来の清津峡に思い入れがある清津案内人の間では、清津峡に作品が入ることに対しては反対の声が多かったという。今ではその人気ぶりによって清津案内人の声が届きにくくなっている傾向にある上、そこにコロナで活動できないことも相まって、20人ほどのメンバーは、5～6人程度に減少してしまった、と渋谷は話す。その一方で渋谷は、地元でサポーターとして関わっている人は思っている程多くなく、サポーターと非サポーターの間には温度差があることを述べた上で、市町村同士のつながりや、若い世代の関わりが増えることを期待している。「地域を広くして繋がりを持たせて、『協働』の意識を持つ人が増えることで、芸術祭や地域の持続可能性も高まっていくだろう」と述べている。

4.3 ヒアリング結果を踏まえた考察

6名へのヒアリングを通して見えてきたことは、まずは①「協働」に対する活動や認識はそれぞれではあるが、そこには複数の共通点が見られる。まず、他者同士が関わっていくことについては、被験者の全員が述べており、このことは「協働」において重要な要素であることは明らかである。加えて、継続的な活動であることは原や高橋が述べており、自らの力を動員することは鞍掛や水落、渋谷が述べている。また、提案の部分にはなるが、「協働」に関わる地域を拡大させることは、高橋や渋谷が述べている。そして、②

「協働」において大切にしていることに関しても、基本的には被験者の活動に基づいた内容にはなっているが、被験者の多くから活動に対する熱意が感じられることに加え、自身だけでなく他者との「協働」のあり方についても発言があった。このことから、被験者が他者を「協働」の取り組みに導く力があることが予想され、そのような力を持った被験者の周辺では「協働」の取り組みは発展していきだろう。③活動の中で地域や芸術祭の持続可能性を感じたことについては、肯定的な意見や前向きな提案が多い一方で、一部では課題があることも明らかとなった。これに関しては、被験者も述べているように「協働」の取り組みは初めからうまくいくとは限らないほか、そこに関わる人や作品、集落の性質も影響していると考えられるため、一様に問題であるとは言い難い。今は課題がある「協働」も、その取り組みが継続され、課題が見直されながら、芸術祭や地域の持続可能性に繋がっていくことに期待したい。

最後に、第1章で筆者が述べた「協働」の定義の過程も振り返ってみる。筆者は大地の芸術祭における協働を「越後妻有地域の実情を都度考慮しながら、作品を取り巻く多様な人々によって大地の芸術祭を実行する主体的な活動全般とその過程」としていたが、ここに含まれる「作品を取り巻く」、「多様な人々」、「主体的」、「過程」といった要素は、先に述べたヒアリング結果の内容とも共通する部分がある。したがって、筆者の考えた「協働」の定義は、過程の段階からより現実味を帯びてきたと捉えることができる。加えて、筆者は調査以前から作品スタッフや地元サポーターおよびこへび隊（ともに再編前）として活動しており、そして本研究の調査を行った2021年度は、調査と並行しながらNPO法人越後妻有里山協働機構において大地の芸術祭の運営に携わってきた。筆者もまた現在の「協働」の主体であり、本調査によって大地の芸術祭における「協働」の認識を広く提示することができたのではないだろうか。

結論

本研究によって、大地の芸術祭における「協働」の変遷や在り方をある程度把握できたと考えている。大地の芸術祭は世界的にも注目されている国際芸術展であるが、その取り組みの中心を担う「協働」に関しては、これまでほとんど研究が進められてこなかった。しかしながら、本研究における文献調査、現地でのアンケート調査及びヒアリング調査から、大地の芸術祭における「協働」は、その主体や集落の状況、そして時代ごとに変遷を遂げていることが明らかになった。

開催から約 20 年、大地の芸術祭は世界中から地域活性化の取り組みとして注目を集め、地域内外からも利害関係を越えた多くの協力を得ることができ、その様子は反対や批判から始まった初期を想像できないほどである。「協働」もまた大地の芸術祭と同じ歴史を辿ってきており、「協働」が許されなかった当初に比べるとかなり発展的な活動が見られるようになってきている。このような、大地の芸術祭および「協働」の理想的な発展の裏には、北川をはじめとする運営側の地道な努力があり、越後妻有地域を尊重する作品と「協働」の制作スタイルは保守的な地域に活性化の流れをもたらしてきた。

そして、現在の《うぶすなの家》に代表されるように、市街地から離れた限界集落における現代アートや地域の食事、雪国の生活文化、澁漕とした地域のお母さんたちとの出会いの全ては来訪者にとってかけがえのない宝物になる。もちろん、《うぶすなの家》においても「協働」は行われており、そこでの取り組みは大地の芸術祭作品の「協働」の中でもとりわけ発展を遂げている。集落で発展した「協働」によって芸術祭は魅力を増し、その取り組みは、地域のみならず芸術祭の双方に持続可能性をもたらすことが分かってきた。

一方で、《ポチョムキン》のように作品が集落に浸透せず、「協働」が順調に進められていない集落があることもまた事実である。《ポチョムキン》は大地の芸術祭を代表する作品であるにも関わらず住民からの支持が低く、最近では集落内での作品管理に課題が生じている。現時点では《ポチョムキン》における活動を「協働」と呼ぶことは難しいように思われるが、集落内には意識を持って維持管理に関わる者や、《ポチョムキン》に愛着を持つ者が一定数存在しており、今後、倉俣集落と《ポチョムキン》の関係性が「協働」へと発展していくことも考えられる。そのためには、より多くの住民の主体的かつ継続的な活動への参加や作品に対する愛着や誇りが今以上に必要である。幸い、《ポチョムキン》には越後妻有里山協働機構スタッフと維持管理を受け持つ住民が定期的に連絡を取り合っており、2022 年に開催予定の芸術祭での動向に期待したい。

ここまで見てきた通り、大地の芸術祭における「協働」には明確な定義が無く、その内容は時代や場所、語る人によってさまざまである。しかしながら、本研究においては大地の芸術祭における「協働」を「越後妻有地域の実情を都度考慮しながら、作品を取り巻く多様な人々によって大地の芸術祭を実行する主体的な活動全般とその過程」と仮定し、実際に「協

働」の前線に携わる 6 名へのヒアリングと合わせて論を進めてきた。これにより、「協働」の取り組みは、他者同士が関わっていくことや、継続的な活動であること、自らの力を動員すること、関わる地域を拡大させること、といった要素が共通項として見られ、それらは「協働」を定義する上でも重要な要素として考えていくことができる。ヒアリングの内容から、地域の状況に合わせて「協働」の取り組みはこれからも発展していく余地があるほか、「協働」がより多くの場面で芸術祭や地域に対して持続可能性をもたらす展望も考えられる。今後の「協働」がどのような変遷を遂げていくのか注目していきたい。

最後に、大地の芸術祭は新型コロナウイルスの影響を強く受け、過去最大規模で開催した第 7 回展（2018 年）からの本祭の延期決定と夏プログラムの長期開催（2021 年）、さらには「トリエンナーレ」の名称を外した第 8 回展の超長期開催予定（2022 年）など、柔軟に新しい取り組みを模索している。世界中が前例の無い有事にさらされ、大地の芸術祭の醍醐味である移動・交流が制限されるという逆境にも関わらず、大地の芸術祭はいま、成熟段階から再び進化・発展の時代に突入しており、同時に「協働」の内容もまた変容を遂げていくだろう。この転換期において現地で長期的な調査を行い、地域住民からの視点と、運営側の視点の双方を調査結果としてまとめたことは、大地の芸術祭の運営の全てで重要な「協働」の取り組みとその効果を広く知らせることのみならず、地域密着型の他の芸術祭やアートプロジェクトの運営にとっても意味がある。

謝辞

最後に、本研究を進めるにあたり、《ポチョムキン》での調査にご協力頂きました倉俣集落の皆様、倉俣有志の会の皆様、NPO 法人越後妻有里山協働機構の作品メンテナンスに携わる皆様、ヒアリング調査にご協力頂きました、NPO 法人越後妻有里山協働機構事務局長/株式会社アートフロントギャラリーの原蜜氏、NPO 法人越後妻有里山協働機構の横尾悠太氏、作家/日本大学芸術学部美術学科教授の鞍掛純一氏、十日町市観光交流課芸術祭企画係係長の高橋剛氏、うぶすなの家スタッフ/十日町市議会議員の水落静子氏、大地の芸術祭元サポーター/清津案内人の渋谷雅裕氏、倉俣集落の高橋定利氏、島田実氏、齋喜シズヨ氏、田中俊之氏、高橋紫氏、鈴木海氏、鈴木ヨシ子氏、高橋翼氏、岡村芳浩氏、島田勝広氏、倉又小学校卒業生の鈴木統子氏、鈴木未来氏、作品解説をしてくださいました《ポチョムキン》作家の Sami Rintala 氏、そして、研究や執筆にあたり様々なご指導を頂きました富山大学芸術文化学部の松田愛講師に多大なご尽力を頂きましたことを心より感謝いたします。

参考文献

- ・ 大地の芸術祭・花の道実行委員会東京事務局『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003 ガイドブック』大地の芸術祭・花の道実行委員会東京（2003）
- ・ 北川フラム／監修『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2006 公式ガイドブック 美術手帖 2006 年 7 月増刊』美術出版社（2006）
- ・ 北川フラム／監修『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2009 公式ガイドブック アートをめぐる旅ガイド』美術出版社（2009）
- ・ 北川フラム／監修『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2012 公式ガイドブック アートをめぐる旅ガイド』美術出版社（2012）
- ・ 北川フラム／監修『大地の芸術祭 公式ガイドブック 越後妻有アートトリエンナーレ 2015』現代企画室（2015）
- ・ 北川フラム／監修『大地の芸術祭 公式ガイドブック 越後妻有アートトリエンナーレ 2018』現代企画室（2015）
- ・ 2022 年「大地の芸術祭」名称・開催日程 決定 - ニュース | 大地の芸術祭 (echigo-tsumari.jp) (最終閲覧日 2022 年 1 月 7 日)
- ・ 北川フラム『大地の芸術祭 <ディレクターズ・カット>』角川学芸出版（2010）
- ・ 2022 年「大地の芸術祭」名称・開催日程 決定 - ニュース | 大地の芸術祭 echigo-tsumari.jp (最終閲覧日 2022 年 1 月 7 日)
- ・ 「ART FRONT GALLERY | 5 つの芸術祭の現在 北川フラム」
https://www.artfront.co.jp/jp/news_blog/%ef%bc%95%e3%81%a4%e3%81%ae%e8%8a%b8%e8%a1%93%e7%a5%ad%e3%81%ae%e7%8f%be%e5%9c%a8-%e3%80%80%e5%8c%97%e5%b7%9d%e3%83%95%e3%83%a9%e3%83%a0/ (2021 年 2 月 24 日付、最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)
- ・ 『明鏡国語辞典第二判』大修館書店、2016 年
- ・ 北川フラム『美術は地域をひらく 大地の芸術祭 10 の思想』現代企画室（2014）
- ・ 澤村明『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の十三年 2000-2012』慶應義塾大学出版会（2014）
- ・ 大地の芸術祭・花の道実行委員会東京事務局編『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003』、現代企画室（2004）
- ・ 《LAND(e)SCAPE》 <https://rintalaeggertsson.squarespace.com/finland-landscape-1999> (最終閲覧日 2022 年 1 月 13 日)
- ・ Echigo-Tsumari Public Sauna - 作品 | 大地の芸術祭 https://www.echigo-tsumari.jp/art/artwork/echigo_tsumari_public_sauna/ (最終閲覧日 2022 年 1 月 10 日)
- ・ 令和 3 年 6 月末時点、住民基本台帳人口／十日町市 tokamachi.lg.jp (最終閲覧日 2022 年 1 月 10 日)

- ・ 「ポチヨムキン村」は実在したか：はりぼての村に関する神話の背景 - ロシア・ビヨンド rbth.com （最終閲覧日：2022 年 1 月 10 日）
- ・ +++see/saw+++ (nibroll.com)http://www.nibroll.com/works/see_saw.html （最終閲覧日：2022 年 1 月 10 日）
- ・ 勝村（松本）文子ほか『住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因
- ・ —大地の芸術祭 妻有トリエンナーレを事例として—』（2008）
- ・ 北川フラム／大地の芸術祭実行委員会『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018』株式会社現代企画室（2019）